

コノリ遺跡 2

—コノリ遺跡群第4次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第876集

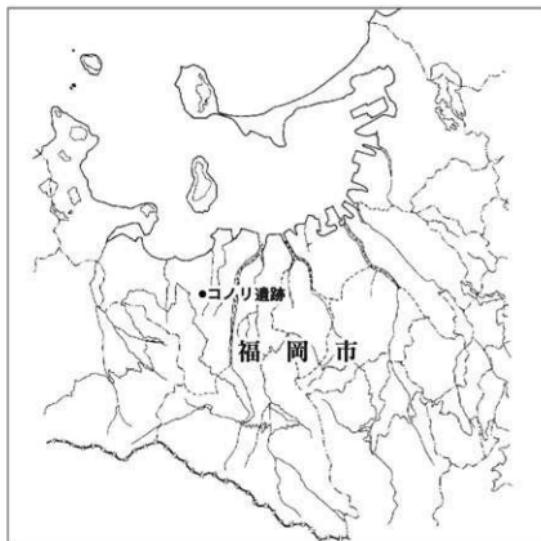


2006
福岡市教育委員会

コノリ遺跡 2

—コノリ遺跡群第4次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第876集



調査番号 0463
遺跡略号 KNR-4

2006
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたしますコノリ遺跡では、これまでに奈良時代や中世後半の建物や溝、古墳や製鉄炉などが調査されています。また、縄文時代や弥生時代の土器・石器も出土しています。

今回の調査では弥生時代・古墳時代の竪穴住居や奈良時代の掘立柱建物などが発見され、弥生土器、須恵器、土師器などの当時の生活用具が出土し、この地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　言

1. 本書は、福岡市西区拾六町団地内における市営拾六町団地建て替えに伴い、福岡市教育委員会が2004（平成16）年11月17日から2005（平成17）年3月31日にかけて発掘調査を実施したコノリ遺跡群第4次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、柵→S A、建物→S B、竪穴住居→S C、溝→S D、土坑→S K、ピット→S Pとした。遺構番号はピット以外を種類に関係なく連番とした。
3. 本書に使用した遺構実測図は宮井善朗（埋蔵文化財課）・上野道郎・田上勇一郎が作成した。遺物実測図は新海達也（早稲田大学）、田上が作成した。製図は田上があたった。旧石器時代の遺物の実測・製図は吉留秀敏（埋蔵文化財課）がおこなった。
4. 本書に使用した写真は空中写真については有限会社空中写真企画が、そのほかは田上が撮影した。
5. 本書に使用した標高は海拔高である。
6. 本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
7. 本書の執筆はⅡ-5を吉留が、そのほかの執筆と編集を田上がおこなった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。



表紙写真　調査対象地全景空撮（西から）

目 次

I	はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1	
2. 調査の組織	1	
3. 調査地点の立地と環境	2	
II	調査の記録	4
1. 調査の経過	4	
2. A区の調査	6	
(1) 溝	6	
(2) 土坑	6	
(3) その他の遺物	7	
3. B区の調査	8	
(1) 櫃	10	
(2) 掘立柱建物	10	
(3) 竪穴住居	13	
(4) 溝	27	
(5) 土坑	33	
(6) ピット出土の土器	39	
(7) 石器	40	
4. C区の調査	42	
(1) 掘立柱建物	43	
(2) 竪穴住居	44	
(3) 土坑	46	
5. 旧石器時代の遺物	48	
III	まとめ	50

挿図目次

Fig. 1	コノリ遺跡と調査地点の位置	2	Fig.28	SD22実測図	27
Fig. 2	周辺の遺跡と調査対象地	3	Fig.29	SD22出土遺物実測図1	28
Fig. 3	明治33年の地形と調査対象地	3	Fig.30	SD22出土遺物実測図2	29
Fig. 4	調査区位置図	5	Fig.31	SD23実測図	31
Fig. 5	SD02実測図	6	Fig.32	SD23出土遺物実測図	32
Fig. 6	A区遺構分布図	折り込み	Fig.33	SK10実測図	33
Fig. 7	SK01実測図	7	Fig.34	SK11実測図	34
Fig. 8	SK03実測図	7	Fig.35	SK12実測図	34
Fig. 9	A区出土遺物実測図	7	Fig.36	SK12出土遺物実測図	35
Fig.10	B区遺構分布図	折り込み	Fig.37	SK15実測図	35
Fig.11	SA18実測図	10	Fig.38	SK15出土遺物実測図	36
Fig.12	SB04実測図	10	Fig.39	SK16実測図	37
Fig.13	SB17実測図	11	Fig.40	SK16出土遺物実測図	38
Fig.14	SB19実測図	11	Fig.41	ピット出土遺物実測図	40
Fig.15	SB17出土遺物実測図	12	Fig.42	B区出土石器実測図	41
Fig.16	SB20実測図	12	Fig.43	C区遺構分布図	折り込み
Fig.17	SB27実測図	12	Fig.44	SB45実測図	43
Fig.18	SC05・06・SD07実測図	13	Fig.45	SD46実測図	43
Fig.19	SC05・06出土遺物実測図	15	Fig.46	SB47・SD33実測図	44
Fig.20	SC08・SD09実測図	16	Fig.47	SD33出土遺物実測図	44
Fig.21	SC08出土遺物実測図	17	Fig.48	SC37実測図	45
Fig.22	SC13・14・21実測図	折り込み	Fig.49	SC37出土遺物実測図	45
Fig.23	SC13・14出土遺物実測図	20	Fig.50	SK31実測図	46
Fig.24	SC26実測図	21	Fig.51	SK35実測図	46
Fig.25	SC26出土遺物実測図1	22	Fig.52	SK36実測図	47
Fig.26	SC26出土遺物実測図2	23	Fig.53	SK36出土遺物実測図	47
Fig.27	SC26出土遺物実測図3	24	Fig.54	旧石器時代の遺物実測図	49

写真目次

Ph. 1	B区作業風景	4	Ph.27	SC26出土遺物 2	26
Ph. 2	A区全景空撮	6	Ph.28	SD22遺物出土状況 1	27
Ph. 3	SD02	6	Ph.29	SD22遺物出土状況 2	27
Ph. 4	SK01	7	Ph.30	SD22遺物出土状況 3	27
Ph. 5	SK03	7	Ph.31	SD22出土遺物 1	28
Ph. 6	A区出土遺物	7	Ph.32	SD22出土遺物 2	30
Ph. 7	B区遠景空撮	8	Ph.33	SD23	31
Ph. 8	B区全景空撮	9	Ph.34	SD23遺物出土状況 1	31
Ph. 9	SB04	10	Ph.35	SD23遺物出土状況 2	31
Ph.10	SB19	10	Ph.36	SD23出土遺物	32
Ph.11	SB20	12	Ph.37	SK12遺物出土状況	35
Ph.12	SC05・06・SD07	14	Ph.38	SK12出土遺物	35
Ph.13	SC05遺物出土状況 1	14	Ph.39	SK15遺物出土状況	35
Ph.14	SC05遺物出土状況 2	14	Ph.40	SK15出土遺物	37
Ph.15	SC06遺物出土状況	14	Ph.41	SK16	38
Ph.16	SC05・06出土遺物	15	Ph.42	SK16遺物出土状況	38
Ph.17	SC08・SD09	17	Ph.43	SK16出土遺物	39
Ph.18	SC08遺物出土状況	17	Ph.44	SP56遺物出土状況	40
Ph.19	SC08出土遺物	18	Ph.45	SP100遺物出土状況	40
Ph.20	SC13・14・21	19	Ph.46	C区全景	42
Ph.21	SC13遺物出土状況	19	Ph.47	SB45	43
Ph.22	SC14	19	Ph.48	SB46	43
Ph.23	SC13・14出土遺物	19	Ph.49	SC37	45
Ph.24	SC26遺物出土状況 1	21	Ph.50	SK35	47
Ph.25	SC26遺物出土状況 2	21	Ph.51	SK36	47
Ph.26	SC26出土遺物 1	25	Ph.52	SK36出土遺物	47

I　はじめに

1. 調査にいたる経緯

2000（平成12）年6月29日付け福建築683号で、福岡市建築局建替整備課長より福岡市西区拾六町団地における市営拾六町団地建て替えに伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、申請地がコノリ遺跡群の範囲内であることから、試掘調査が必要と判断した。試掘調査は同年11月29日と2001（平成13）年4月25日に実施し、対象地の一部に土坑や柱穴などの遺構が存在することが確認された。さらに2001（平成13）年7月3日付け福建築第525号で、前回申請地に加え、新たな申請地を含めた事前審査願が提出され、同年9月26日と10月10日に試掘調査を実施し、一部に遺跡の存在が確認された。そこで、試掘調査の結果をふまえ、建築局と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、遺跡が存在する部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。現地での発掘調査は2004（平成16）年11月17日より2005（平成17）年3月31日まで実施した。整理作業と報告書の刊行は2005（平成17）年度におこなった。

2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 福岡市建築局建替整備課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子

調査統括 埋蔵文化財課 課長 山口譲治

調査第1係長 田中壽夫（平成16年度）

山崎龍雄（平成17年度）

調査庶務 文化財整備課 管理係 後藤泰子

事前協議 埋蔵文化財課 事前審査係長 清石哲也

事前審査係 井上蘭子

調査担当 埋蔵文化財課 調査第1係 田上勇一郎

調査作業 青木和代 青木隆治 青木真孝 青木泰生 有江笑子 上野道郎 國部静江 海津宏子

金子由利子 指山歌子 佐藤直利 柴田勝子 柴田春代 染井美保子 永島重俊

西納富士夫 東直人 平井和子 堀川ヒロ子 三村悦子 山本キミ子 吉岡員代

整理作業 川田京子 山口とし子

調査番号	0 4 6 3			遺跡略号	K N R - 4	
調査地地積	西区拾六町団地			分布地図番号	拾六町 1 0 4	
開発面積	16,300m ²	調査対象面積	2,000m ²	調査面積	2,025m ²	
調査期間	2004（平成16）年11月17日～2005（平成17）年3月31日					

3. 調査地点の立地と環境 (Fig.1~3)

福岡市西部の叶岳から北に続く山塊は海にまで延び、福岡平野（狹義の早良平野）の西を画す。コノリ遺跡はこの山塊の北東に位置している。東側は山裾部を十郎川が流れ、その東岸は沖積地となっている。現在、1961（昭和36）年より福岡市初の市営住宅として造成された拾六町団地を中心に住宅が広がっている。

コノリ遺跡北方には弥生時代終末から古墳時代初頭の集落や弥生時代終末の埴丘墓が調査された宮の前遺跡や、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落と多数の建築部材が出土した湯納遺跡がある。北に接する烟ヶ尾遺跡は調査例がないが、弥生時代中期～後期の甕棺が採集されている。

東側の沖積地には牟多田遺跡があり、4世紀後半～5世紀初めの溝群や河川が調査されている。その東の拾六町亀田遺跡では中世前半の井戸や土坑が調査されている。

コノリ遺跡では、1973（昭和48）年に日本大学によって古墳8基の調査がおこなわれた（未報告）。そのほか壱岐公民館建設（市報162集）や壱岐小学校校舎増築にともない発掘調査がおこなわれている。

市営拾六町団地内については、造成時には多数の土器が出土していたというが、調査はされていない。建物は現在、順次立て替えが進められており、建築前には確認調査をおこない、遺構が認められた部分の調査を実施している。1998（平成10）年には1,500m²の調査がおこなわれ、縄文時代から中世までの遺構・遺物を確認している（市報728集）。

今回の調査地点は造成前は北東～南西方向の幅90m、長さ250m、標高25mの丘陵が存在していた。現標高が14m前後であるので、中心部は相当削平を受けており、対象地の大部分はすでに遺構は存在しない。



Fig.1 コノリ遺跡と調査地点の位置 (1/50,000)

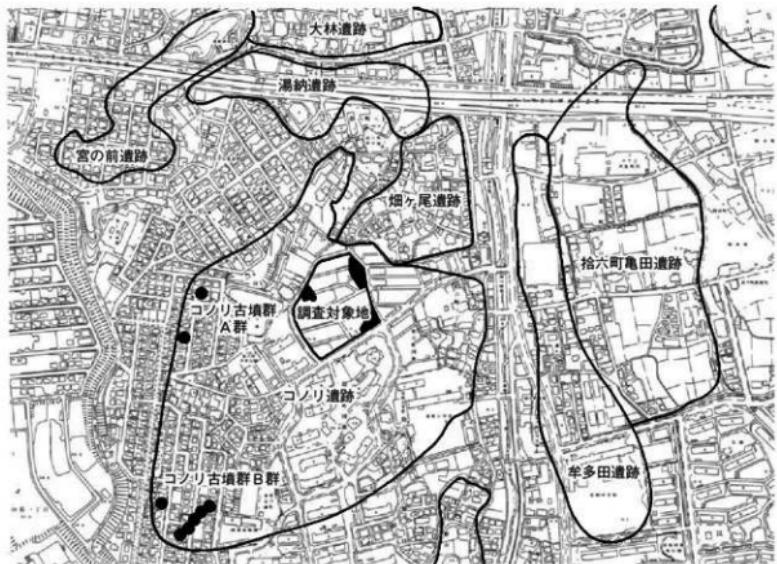


Fig.2 周辺の遺跡と調査対象地 (1/8,000)

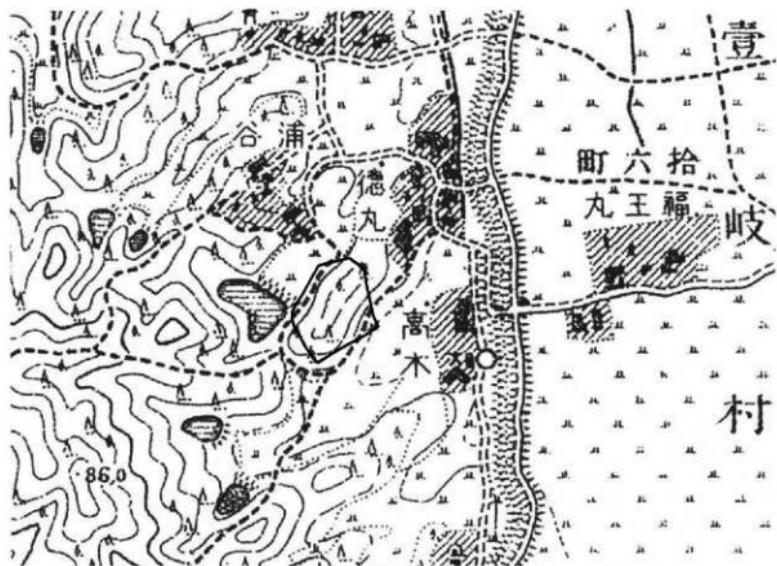


Fig.3 明治33年の地形と調査対象地 (1/8,000)

II 調査の記録

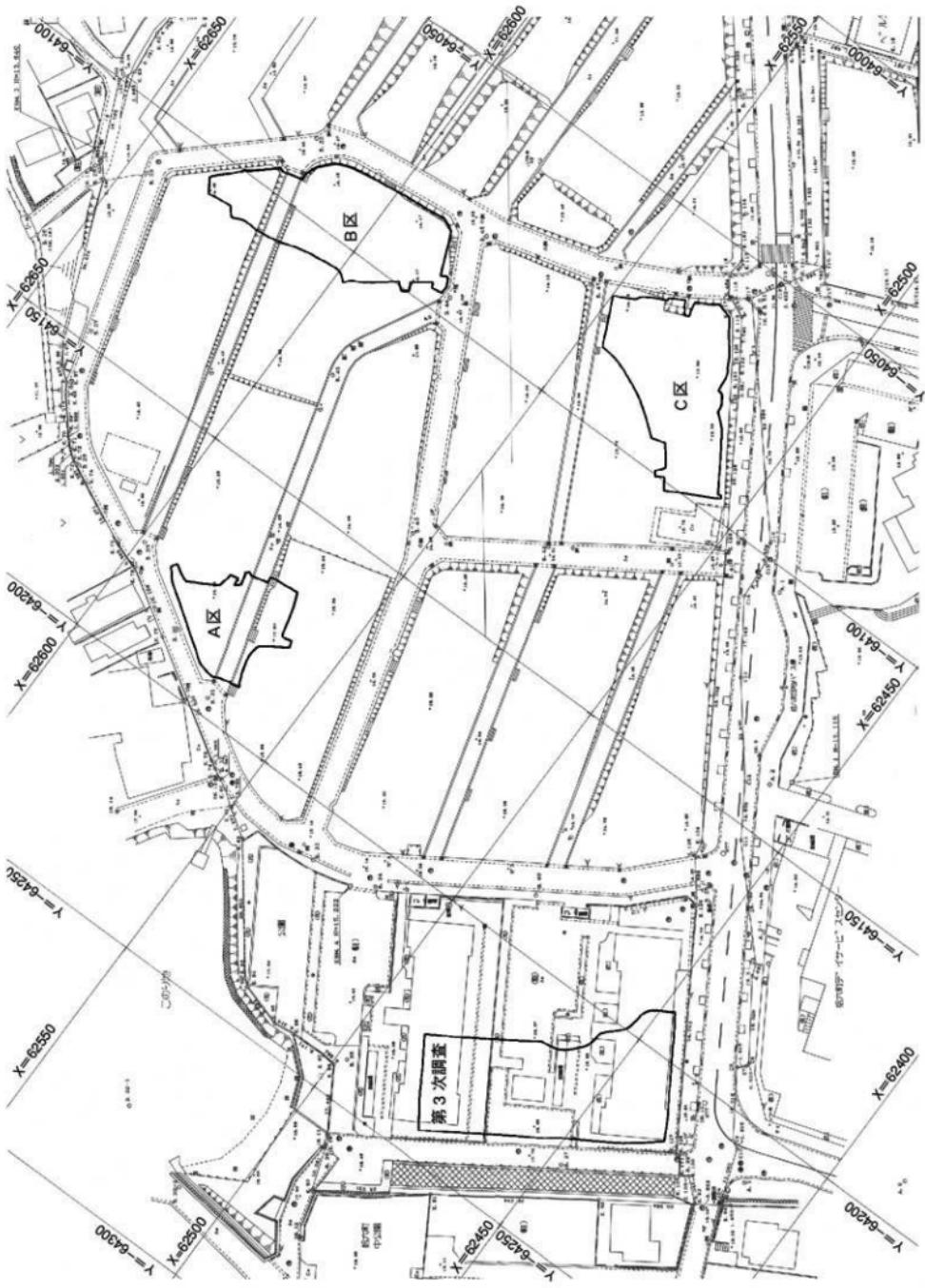
1. 調査の経過

調査は11月17日より開始した。まず、調査区を確定するために試掘トレンチを入れた。事前審査の試掘のメモでは、削平を受けており、遺構面まで浅く、遺構密度も薄そうに思えたが、実際は対象地の際で遺構面が大きく落ち、遺構が良好に残っていることが判明した。当初予定していた3ヶ所のほか、遺構面が残っていそうな北端にも試掘トレンチを入れたが、削平を受けており、遺構は存在しなかった。結局、要調査地は3ヶ所で、北西部をA区、北東部をB区、南東部をC区と名付け、11月19日、A区から重機による表土除去を開始した。

11月22日より作業員を投入し、外柵の設置をおこなった。11月25日よりA区の遺構検出、遺構掘削を開始、同時にB区の表土除去も開始した。12月1日にB区の表土除去が終了し、予想以上に遺構密度が濃いことを確認した。12月3日にはA区の調査を終了し、B区の遺構検出に取りかかった。12月14日までに遺構検出を終了し、翌日より北側から順次遺構掘削を開始した。年末・年始休暇を挟み、2005年1月6日より現場を再開し、C区の表土除去を開始した。2月8日より作業員を倍増し、調査を急いだ。2月23日からはB区と並行してC区の調査を開始した。3月9日に気球による空中撮影をおこなった。3月18日にC区の調査が終了した。3月20日は日曜日であったが、担当者が実測をおこなっていたところ、午前10時52分福岡県西方沖地震が発生した。幸いにも現場には被害は全くなかった。3月22日にA区を埋め戻し、翌日から3月29日までC区の埋め戻しをおこなった。3月31日にはB区を埋め戻し、外柵を撤去して調査を終了した。



Ph.1 B区作業風景（南から）



2. A区の調査 (Fig.6, Ph.2)

A区は北西に開く谷である。調査区内の遺構検出面の標高は最低で12.9m、最高で15.2m。東や南は削平を受けている。調査面積は401m²である。土坑2基、溝1条、ピット多数を検出した。後期の弥生土器が少量出土したほか、重機で掘り下げ中に青磁碗1点と白磁皿2点が出土した。中世の土壤墓があった可能性が高い。弥生土器片が出土するピットもあるが、規模が小さく、人為的な掘り込みかどうか不明。

(1) 溝

SD02 (Fig.5, Ph.3)

北向きの傾斜地に存在する。東西方向に2.5mあり、北向きに1.5m屈曲する。最大の深さは20cm。遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

SK01 (Fig.7, Ph.4)

西向き斜面に位置する。長軸1.7m、短軸0.9mの橢円形の土坑である。北西底面に深さ10cmのピットがある。深さ10cmで、底面は斜面の傾斜に沿っている。弥生土器片が少量出土した。



Ph.2 A区全景空撮 (上が北)

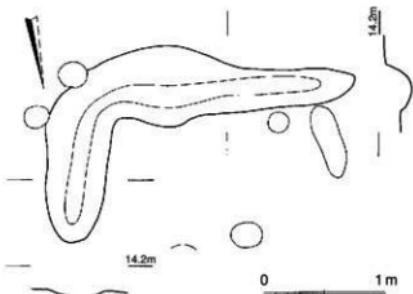


Fig.5 SD02実測図 (1/40)



Ph.3 SD02 (東から)



Fig.6 A区遺構分布図 (1/100)



Ph.4 S K01 (西から)



Ph.5 S K03 (北から)

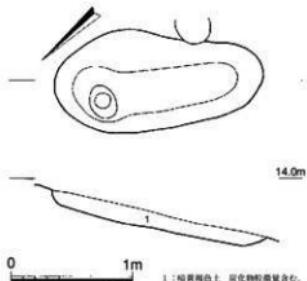


Fig.7 S K01実測図 (1/40)

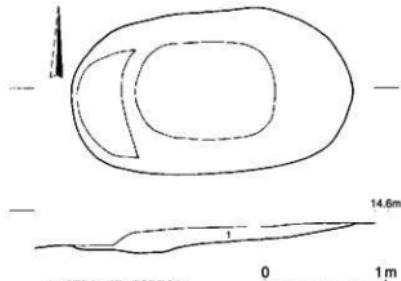


Fig.8 S K03実測図 (1/40)

SK03 (Fig.8, Ph.5)

調査区のやや東よりに位置し、上部は削平を受けているものと思われる。東西方向に長軸があり、長軸2.3m、短軸1.3m、最大の深さ20cmの楕円形の土坑である。後期と思われる弥生土器片が出土している。

(3) その他の出土遺物 (Fig.9, Ph.6)

1～3は重機による掘削時に出土した遺物。土壤墓の副葬品と考えられる。1・2は口縁部の釉を掻き取る口禿の白磁皿。1は口径8.2cm、底径5.8cm、器高1.5cm。灰色がかった白色の不透明釉がかかる。2は口径8.7cm、底径6.0cm、器高1.7cm。底部の釉を拭き取っている。やや青っぽい灰色味がかった白色不透明釉がかかる。3は龍泉窯系青磁碗。外面に鏡蓮弁を施す。内面は無文。口径16.6cm、器高6.6cm、高台径5.2cm。灰オリーブ色の透明釉がかかる。いずれも13世紀代の遺物である。

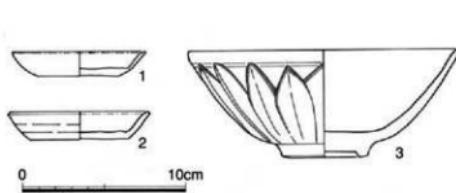


Fig.9 A区出土遺物実測図 (1/3)

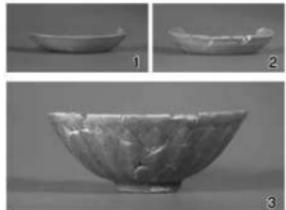


Fig.6 A区出土遺物 (約1/4)

3. B区の調査 (Fig.10, Ph.7・8)

B区は対象地の北東部にあたり、東向きの斜面である。東側以外は団地造成時に削平を受けている。また、水田と思われる段造成により、東側の一部も削平を受けている。調査面積は862m²。柵1基、掘立柱建物5棟、竪穴住居7軒、溝6条、土坑5基、ピット多数を検出した。弥生時代後期、古墳時代後期、中世後期の3時期がある。地山まで下げる遺構検出をおこなったので、斜面の低い方の竪穴住居の東壁が確認できなかった。

(1) 柵

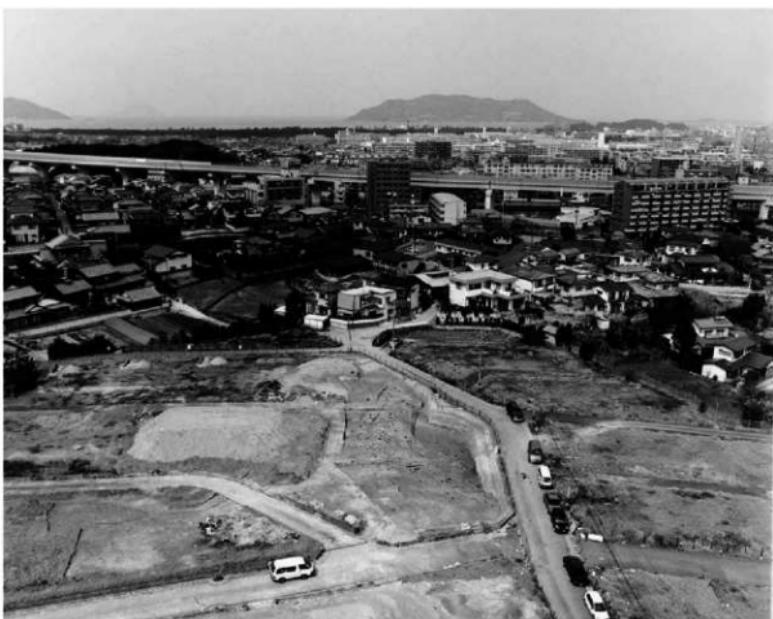
SA18 (Fig.11)

調査区西側中央に位置する。等間隔の連続する3基のピットを検出したが、平行する柱列がなく、柵とした。延長4mを確認しているが西側は擾乱があり、東側は削平を受けているので、長さはさらにのびていた可能性がある。柱穴の直径は30cm前後。一番西の柱穴には据えられていたかは不明だが、礎が検出された。S P312・314からは弥生土器もしくは土師器の小片が出土している。S P314が切るS P315から須恵器片が出土しているので古墳時代後期の遺構と考えられる。

(2) 掘立柱建物

SB04 (Fig.12, Ph.9)

調査区北側で検出した2間×2間の縦柱掘立柱建物。S P38がS C06を切る。一辺3.2mの正方形である。北側中央の柱穴が2穴あり、S P38からS P39にのばした南北軸を延長するとS P35がいい位



Ph.7 B区遠景空撮（南から）

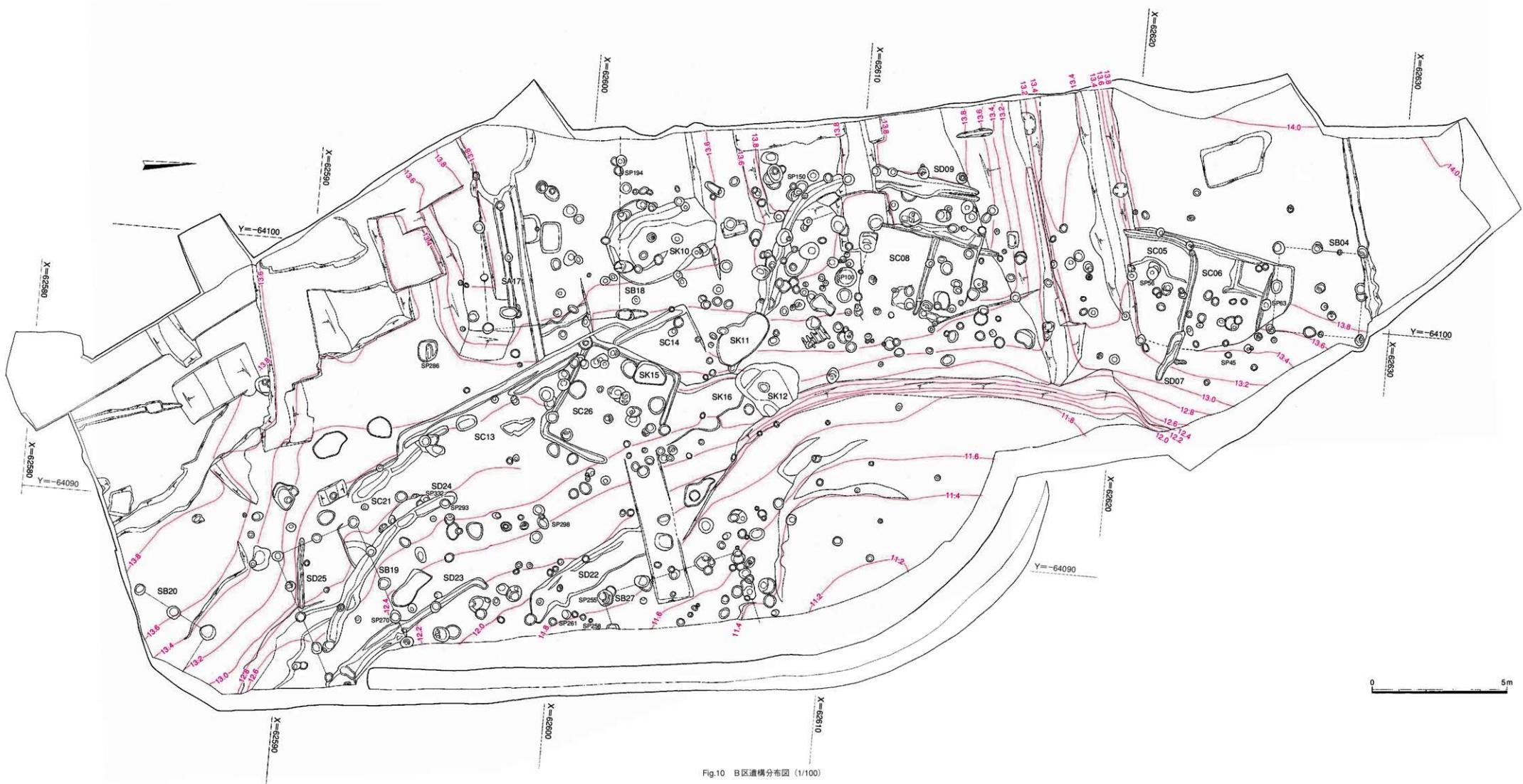


Fig.10 B区遺構分布図 (1/100)



Ph.8 B区全景空撮（上が北）

置にあるが、北辺の柱間から見るとS P35に切られた柱穴の位置の方がよく、判断がつかない。南北の柱間は北がやや広く1.7m、南が狭く1.5mである。柱穴の直径は40cm前後である。20cmぐらいの深さしかなく、削平をかなり受けているようである。柱穴から弥生土器もしくは土師器の小片が出土している。

SB17 (Fig.13・15)

調査区西側中央に位置する。3間×3間の規模を確認しているが、西側にさらにのびると考えられる。また、東側の柱列は搅乱により柱穴が1つ失われていると考えられる。S P200・203には底部に礫が据えられていた。S P200・203・309・328・330からは弥生土器・土師器の小片が出土し、S P203からは須恵器片も出土している。S P311からは15世紀ごろの雷文をへら描きする龍泉窯系青磁碗の口縁部片が出土している(4)。

柱穴は、南側の列は直径30~40cm、深さ50~60cmで底面レベルは水平にそろっており、掘り込みはほぼ垂直であるのに対し、北側の列は楕円形の掘方があったり、礫を据えていたり、底面レベルが斜面に沿っていたりとやや異なっている。また、南と北の軸が西側にやや開いている。柱間はそろっているが、同一の建物でない可能性もある。

SB19 (Fig.14, Ph.10)

調査区南東部に位置する2間×4間以上の掘



Ph.9 SB04 (西から)

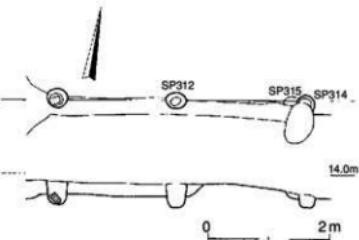


Fig.11 SA18実測図 (1/80)

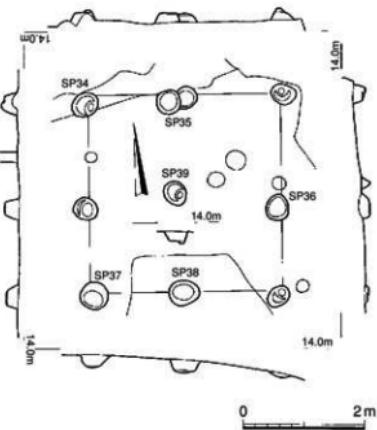


Fig.12 SB04実測図 (1/80)



Ph.10 SB19 (東から)

Fig.14 S B19实测图 (1/80)

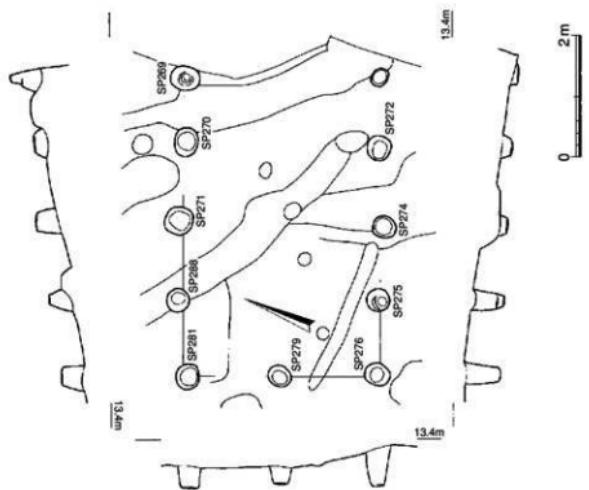
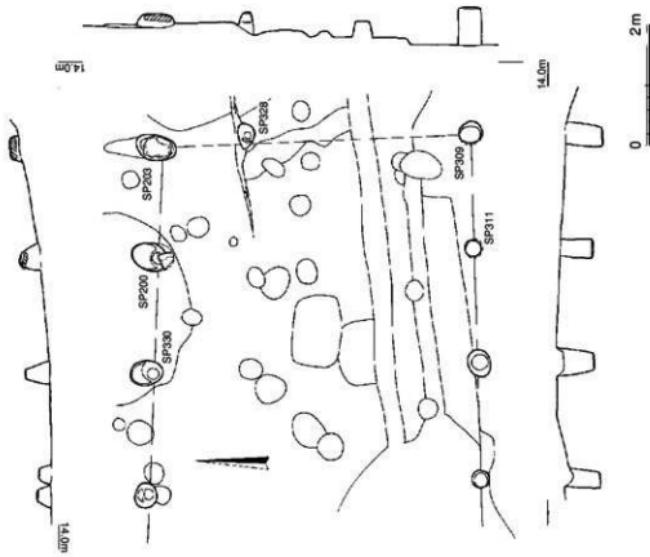


Fig.13 S B17实测图 (1/80)



立柱建物である。柱穴の堀方は40cm前後、底面のレベルは斜面に沿って東に下っている。桁行は4間分で5m、柱間は1.3m、梁行は3.1mで柱間は1.5~1.6mである。柱穴からは弥生土器、土師器が出土し、SP279・281からは須恵器片も出土している。古墳時代後期の建物と考えられる。

SB20 (Fig.16, Ph.11)

調査区南東端で検出した2間分の柱列である。建物は南東に展開するものと思われる。柱間は1.5mである。柱穴は直径40~50cmで覆土が他の遺構と異なり地山に近いものであった。出土遺物はない。

SB27 (Fig.17)

調査区中央東側に位置する2間以上×4間の掘立柱建物。さらに東側に展開する。西側の柱列はどれも重複しており、建て替えか柱の抜き取りがおこなわれたかであろう。桁行は5.3m。柱間は一番南が1.6mと長いが他は1.2mである。梁行の柱間は1.3~1.4mである。柱穴からは弥生土器、土師器が出土し、SP243・244・252からは須恵器片も出土している。古墳時代後期の建物と考えられる。



Ph.11 SB20 (西から)



Fig.15 SB17出土遺物実測図 (1/3)

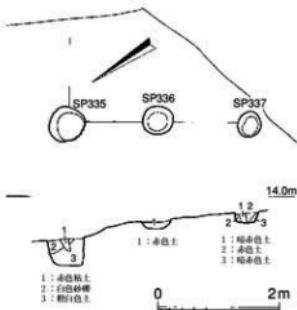


Fig.16 SB20実測図 (1/80)

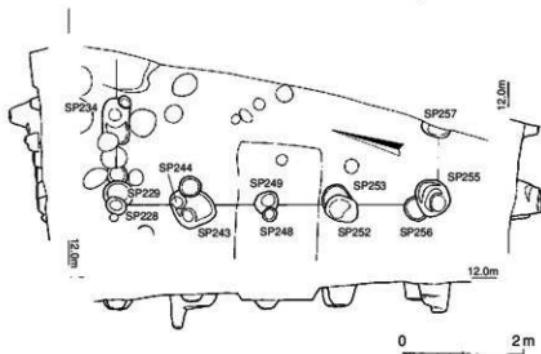


Fig.17 SB27実測図 (1/80)

(3) 突穴住居

SC05・06・SD07 (Fig.18・19, Ph.12~16)

調査区北側で確認された突穴住居である。当初1軒の住居と考えていたが、北側から弥生土器、南側から須恵器が出土し、2軒の重複であることを確認した。南側の住居をSC05、北側の切られてい る住居をSC06とし、当初住居と切り合う溝と考えたSD07は住居を掘り下げていくとSC05の壁溝の延長であることが判明したため、ここで報告する。

SC05は南側を団地内の道路で切り下げられ大部分を失っている。西壁で3m、北壁で4m残存してお り、どちらも壁際に小溝がめぐる。残存壁高は西壁で30cm程度である。主柱穴はSP57とSP33であ る。底面は床面から70cm程の深さである。西壁際に遺物がやまとまって出土している。

出土遺物をFig.19に示す。5・6は須恵器の环蓋である。5は口径14.0cm、器高3.9cm。天井部と体 部の境に沈線があり、口縁端部はやや凹んでいる。外面の調整は粗く、天井部に回転ヘラ削りを施す が、中央部はヘラ切り離し痕を残す。焼成は良好であるが、内面に大きな焼きぶくれがある。外面灰 色、内面灰白色を呈する。胎土は径1~2mmの砂粒を含むが精良。6は口径14.0cm、器高3.3cm。 体部は外に広がり、口縁端部は丸くおさめる。灰色~灰色がかった茶色を呈し、焼成良好である。胎

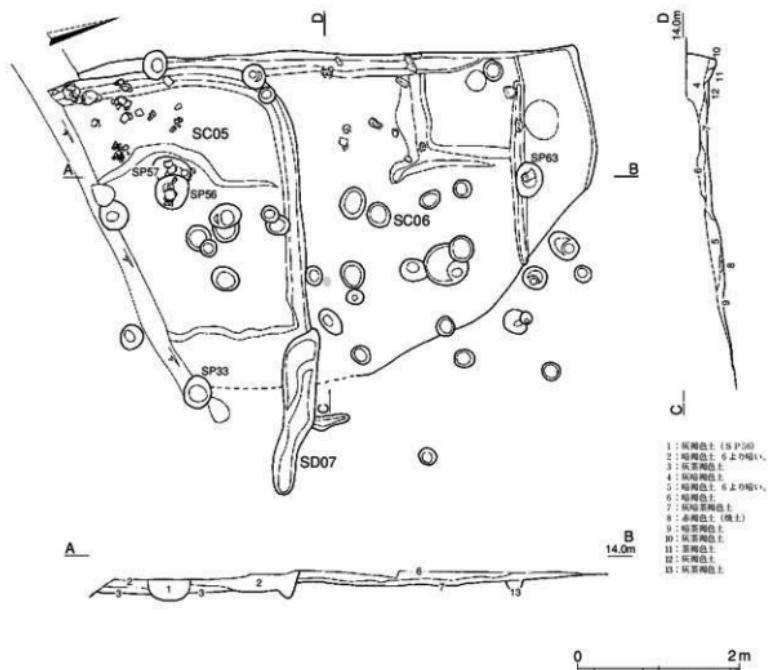
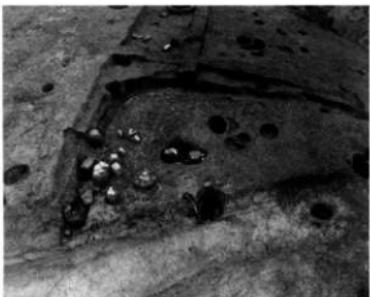


Fig.18 SC05・06・SD07実測図 (1/60)



Ph.12 S C05・06・S D07 (東から)



Ph.13 S C05遺物出土状況 1 (南から)



Ph.14 S C05遺物出土状況 2 (南東から)



Ph.15 S C06遺物出土状況 (南から)

土は径1～5mmの砂粒を含む。7・8は須恵器の环身である。7は口径12.6cm、受け部径14.5cm、器高4.0cm。底部は回転ヘラ削りを施す。立ち上がりのつくりは厚く、内傾し、高くない。胎土は精良で径1～2mmの砂粒をごくわずかに含んでいる。焼成不良。軟質でやや灰色味がかった白色を呈する。8は口径12.0cm、受け部径14.3cm、器高4.0cm。底部は回転ヘラ削りを施す。立ち上がりは内傾し、高くない。胎土は径1～2mmの砂粒を含むが精良。灰色を呈し、焼成良好である。9は土師器の环。口径14.5cm、器高4.1cm。径1～5mmの砂粒を含み、橙白色を呈する。焼成不良で器面が荒れている。

出土遺物より古墳時代後期の住居と考えられる。

S C06は西壁で6m、北壁で4m分確認したが、南側はS C05に切られており、壁のプランの確認のみしかできない。残存壁高は西壁で20cm程度であり、S C05より掘り込みは浅い。西壁際には壁溝があり、北壁には接せずに1m程間隔を開けて東へ曲がる。また、壁溝内北西部には1m四方の区画を小溝によりつくっている。

出土遺物をFig.19に示す。10は弥生土器壺の底部。底径5.4cm。胎土には径1～5mmの砂粒を含む。11は脚付鉢の鉢部。口径16.0cm。胎土には径1～5mmの砂粒を多く含む。

出土遺物より弥生時代後期後半の住居と考えられる。

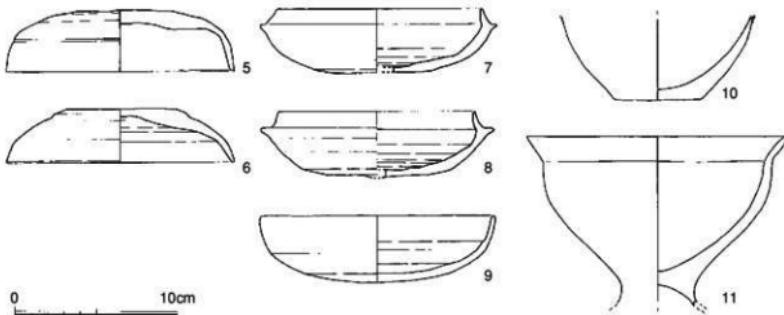
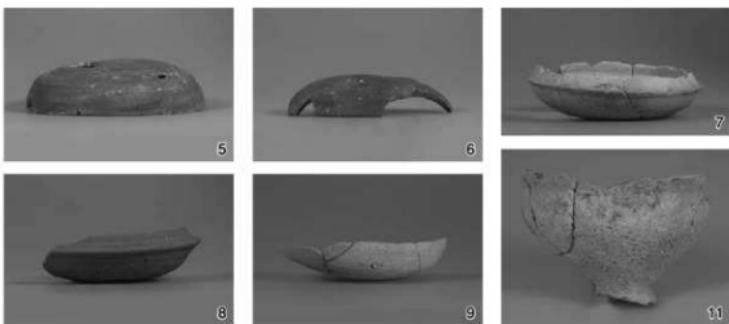


Fig.19 S C 05・06出土遺物実測図 (1/3)



Ph.16 S C 05・06出土遺物 (約1/4)

SC08・SD09 (Fig.20・21, Ph.17~19)

調査区中央よりやや北で検出した竪穴住居とそのまわりをめぐる溝である。S D 09の北側は園地内の道路で切り下げられて残っていない。確実な決め手はないが、S D 09はS C 08の排水用の溝と考えられる。

S C 08は南北は4 m、東西は3.5m以上の規模の方形で、東壁は検出できなかった。西壁の残存高は35cmである。西壁際には小溝が掘られている。また、住居中央に東西方向の小溝が掘られている。東寄りにがとと考えられる炭化物の集中と焼け込みがみられた。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物をFig.21に示す。12は小型の甕である。口縁外反し、頸部に断面三角形の突帯をつける。突帯にはヘラ状工具で刺突する。口径18.0cm、胴部最大径17.1cm。淡橙色～桺灰白色を呈し、胎土は径1～3mmの砂粒を多量含む。13は甕である。口縁は「く」字に屈曲する。口径15.8cm。淡橙白色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を含む。14は甕の底部である。底部は凸レンズ状になる。底径7.2cm。外面橙色、内面灰白色～淡黄褐色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。15は鉢である。器壁は厚い。口径13.8cm、器高15.4cm。黒褐色～灰褐色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。16は小型の鉢である。口径10.6cm、器高7.3cm。外面にタタキ調整を施す。淡灰褐色を呈し、一部に黒斑がみられる。胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。17は脚付鉢である。脚部径

9.0cm。淡灰褐色を呈し、径1～3mmの砂粒を多く含む。**18**は杏形器台である。残存高11.1cm、脚部径11.6cm。外面タタキ調整である。色調は淡橙白色～赤橙白色で胎土に径1～2mmの砂粒を多く含む。**19**は器台である。脚部径16.0cm。淡橙白色を呈し、径1～3mmの砂粒を多く含む。

弥生時代終末の住居である。

S D 09は住居西側では幅70cmで底面は平坦、南側では幅50cmで底面はU字形を呈する。西側は削平が著しい。北側は2条に分かれている。出土遺物に須恵器は入っていなかった。S C 08とともに考えると弥生時代終末の遺構である。

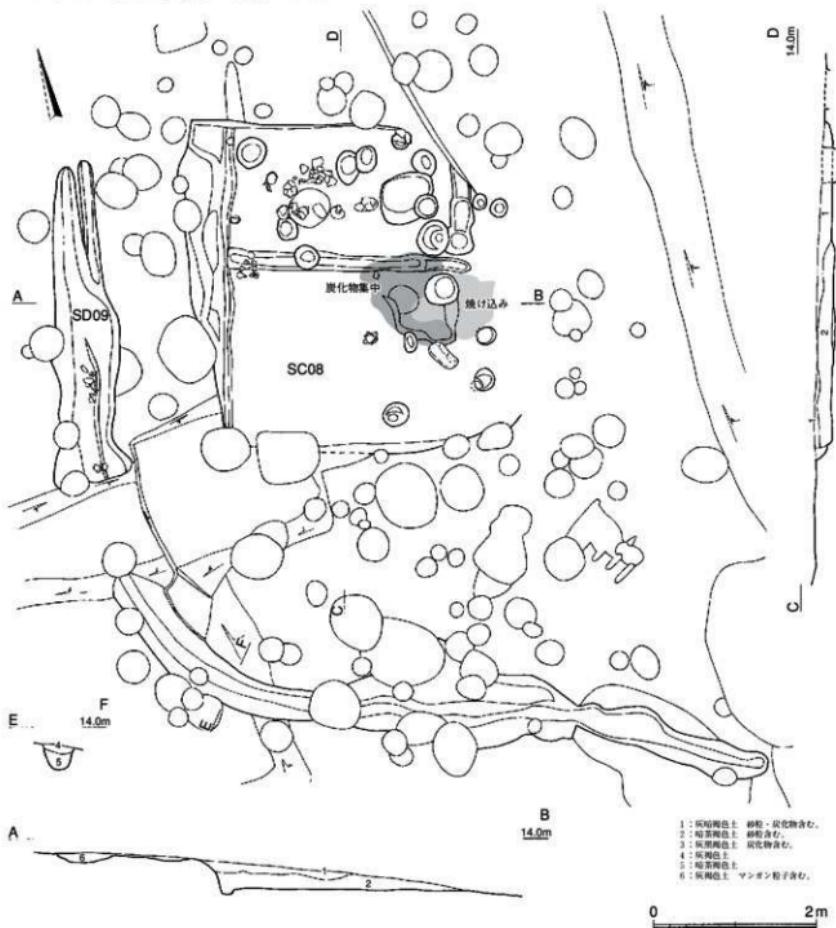


Fig.20 S C 08・S D 09実測図 (1/60)



Ph.17 SC08・SD09 (西から)



Ph.18 SC08遺物出土状況 (西から)

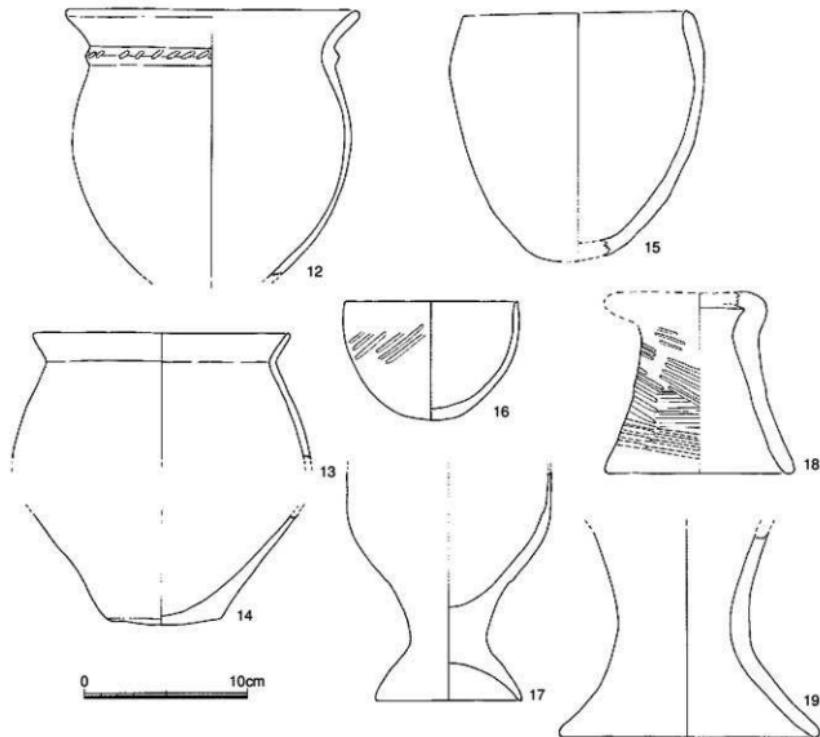
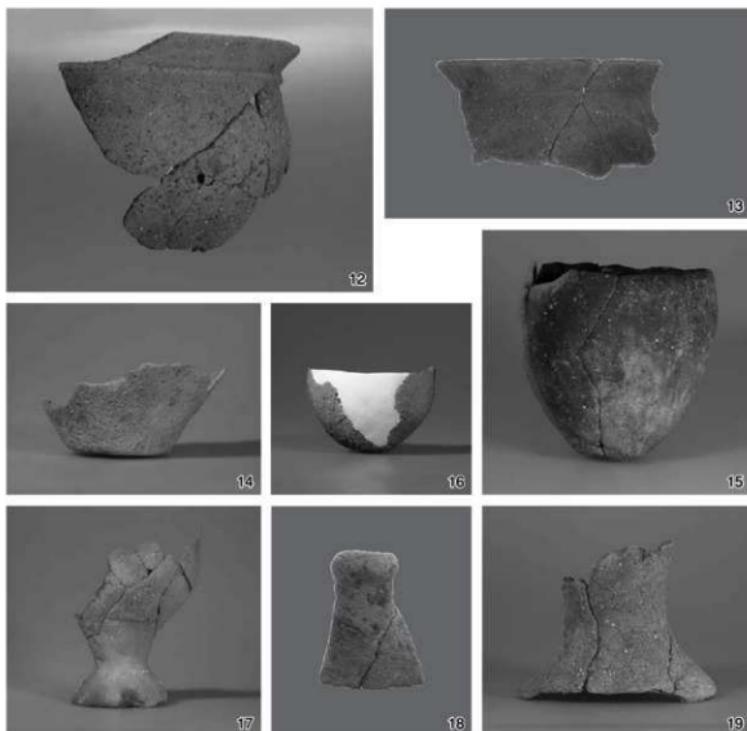


Fig.21 SC08出土遺物実測図 (1/3)



Ph.19 S C 08出土遺物（約1/4）

S C 13・14・21 (Fig.22・23, Ph.20~23)

調査区中央部から南部にかけての住居群である。当初4軒ほどの重複を想定していたが、覆土の違いからは北側の1ヶ所でしか切り合いを確認できなかった。西壁のずれから3軒の住居と考えられ、北からS C 14・S C 13・S C 21とした。いずれも東側、斜面の下方はプランが確認できなかった。

S C 13はS C 14とS C 21の間に位置し、南北10mで東西は東側が斜面で残存悪く確認できていないが2.5~2.8mほど覆土が残存していた。西壁中央付近で壁の下端にずれがあるので、2軒の住居が切り合っている可能性も考えられる。西壁際には壁溝があるが、土層断面をみると住居を切っているようにみえた。

出土遺物をFig.23に示す。20・21は須恵器の坏蓋である。20は口径13.8cm、器高4.3cm。灰色～灰褐色を呈し、胎土に径1mm以下の砂粒をごく少量含む。内面に「×」のヘラ記号がある。21は口径14.4cm、器高3.7cm。天井部はヘラ切り未調整である。胎土に径1mm以下の砂粒を少量含む。灰白色を呈し、焼成はあまり良くない。22は土師器の坏である。口径15.4cm、器高4.5cm。胎土に径1～3mmの砂粒を含む。橙色～橙白色を呈する。23・24は土師器瓶の把手である。

出土遺物よりS C 13は古墳時代後期の住居と考えられる。

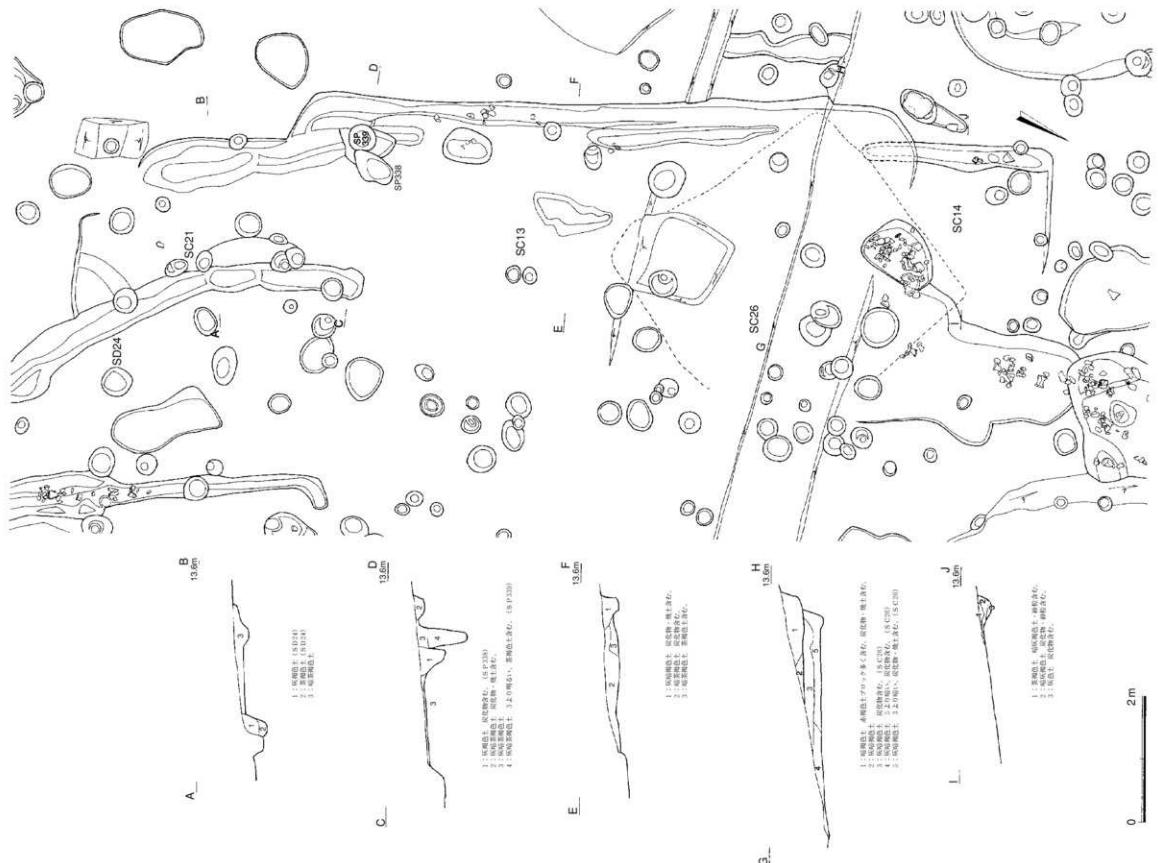


Fig.22 SC13·14·21素描图 (1:60)



Ph.20 S C 13・14・21 (北から)



Ph.21 S C 13遺物出土状況 (北から)



Ph.22 S C 14 (東から)



20



25



27



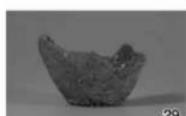
23



26



28



29

Ph.23 S C 13・14出土遺物 (約1/4)

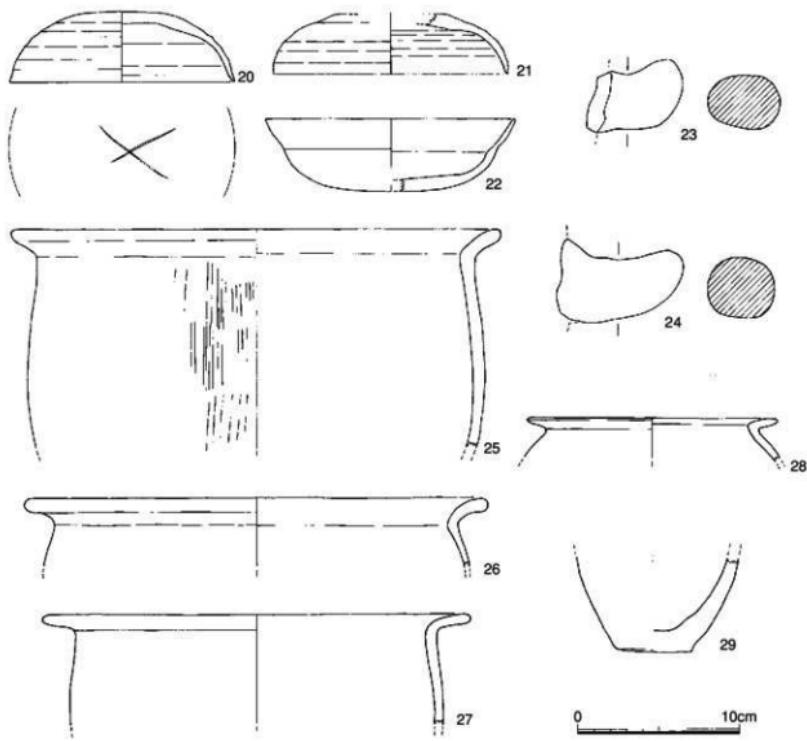


Fig.23 S C 13・14出土遺物実測図 (1/3)

S C 14はS C 13の北側に位置する。S C 13に切られている。北西コーナー部しか確認できず、規模は不明である。西壁際に壁溝があり、南の延長はS C 13の床面に確認できる。

出土遺物をFig.23に示す。25～27は口縁「く」字の弥生土器の甕である。25は口径30.0cm、暗赤橙色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を含む。26は口径28.4cm、淡茶褐色を呈し、胎土に径1mm前後の砂粒を多く含む。27は口径26.2cm、橙白色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を含む。28は弥生土器の無頸壺である。口径15.4cm、橙白色を呈し、外面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土には径1mm程の砂粒が少量含まれている。29は甕の底部である。底径5.8cm。不安定な平底である。赤橙色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を多く含む。

出土遺物よりS C 14は弥生時代後期初頭～前半の住居と考えられる。

S C 21はS C 13の南側に位置する。南西部が確認されたが、南西隅は削平されて確認できなかつた。S D 24に切られている。西壁際に壁溝があり、北側はS C 13の床面までのびている。

S C 21は出土遺物が少なく、図示できるものがない。須恵器は含んでいないので、弥生時代後期の住居であろう。

S C 26 (Fig.24~27, Ph.24~27)

S C 13の床面で確認された。南北4.0m、東西4.4mのほぼ正方形である。残りの良い西側で壁高は40cmである。東側は地山の傾斜によりプランが確認できていない。主柱穴はS P 362もしくはS P 361とS P 363の2ヶ所であろう。壁際には壁溝がめぐる。西から投棄されたような状況で土器が出土している。

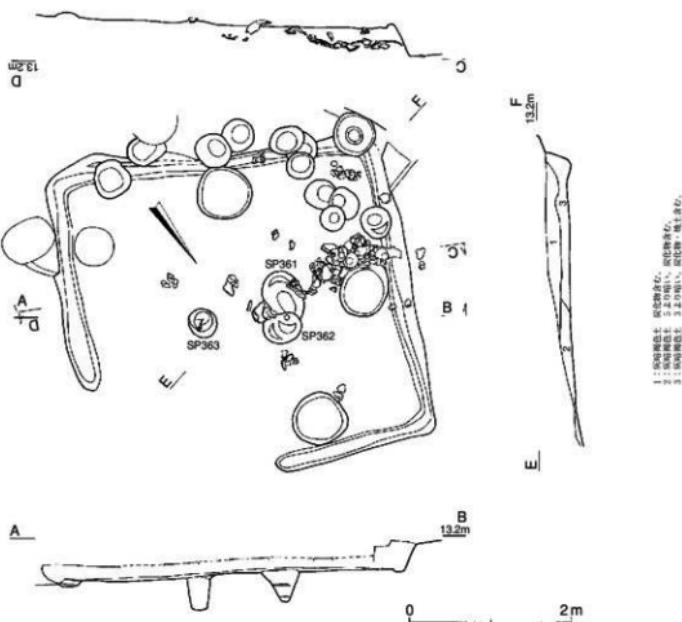


Fig.24 S C 26実測図 (1/60)



Ph.24 S C 26遺物出土状況 1 (東から)



Ph.25 S C 26遺物出土状況 2 (南東から)

出土遺物をFig.25～27に示す。30～39は弥生土器の甕である。30は口縁「く」字の甕で口径27.0cm、底径10.3cm、器高28.0～31.0cm。歪んでいる。外面は目の粗いハケメ調整を施す。淡褐色を呈し、胎土は径1～5mmの砂粒を含む。31も口縁「く」字の甕で口径は26.8cm。外面にハケメ調整を施す。暗赤橙色を呈し、胎土に径1cmを超える大粒の砂礫を含む。32も口縁「く」字の甕で口径は26.3cm。外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施す。暗赤橙色～暗褐色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。33も口縁「く」字の甕で口径は28.8cm。淡灰褐色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を多く含む。34は口縁「く」字の甕で、頸部に断面三角の突帯をつける。口径32.0cm。橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。35は口縁内湾「く」字の甕で、頸部に低い断面三角の突帯をつける。口径30.0cm。橙白色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を含む。36～39は甕の底部。36は底径7.5cm。外面赤橙色、内面暗褐色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を含む。37は底径8.0cm。淡茶褐色～淡灰褐色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。38は底径6.8cm。橙色～淡橙褐色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。39は底径8.4cm。橙白色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。40～

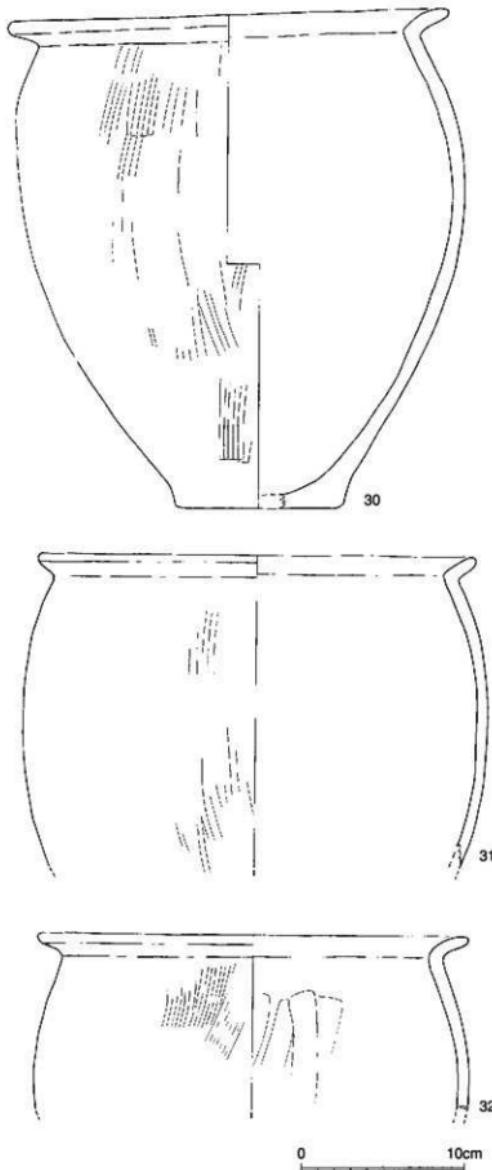


Fig.25 S C 26出土遺物実測図 1 (1/3)

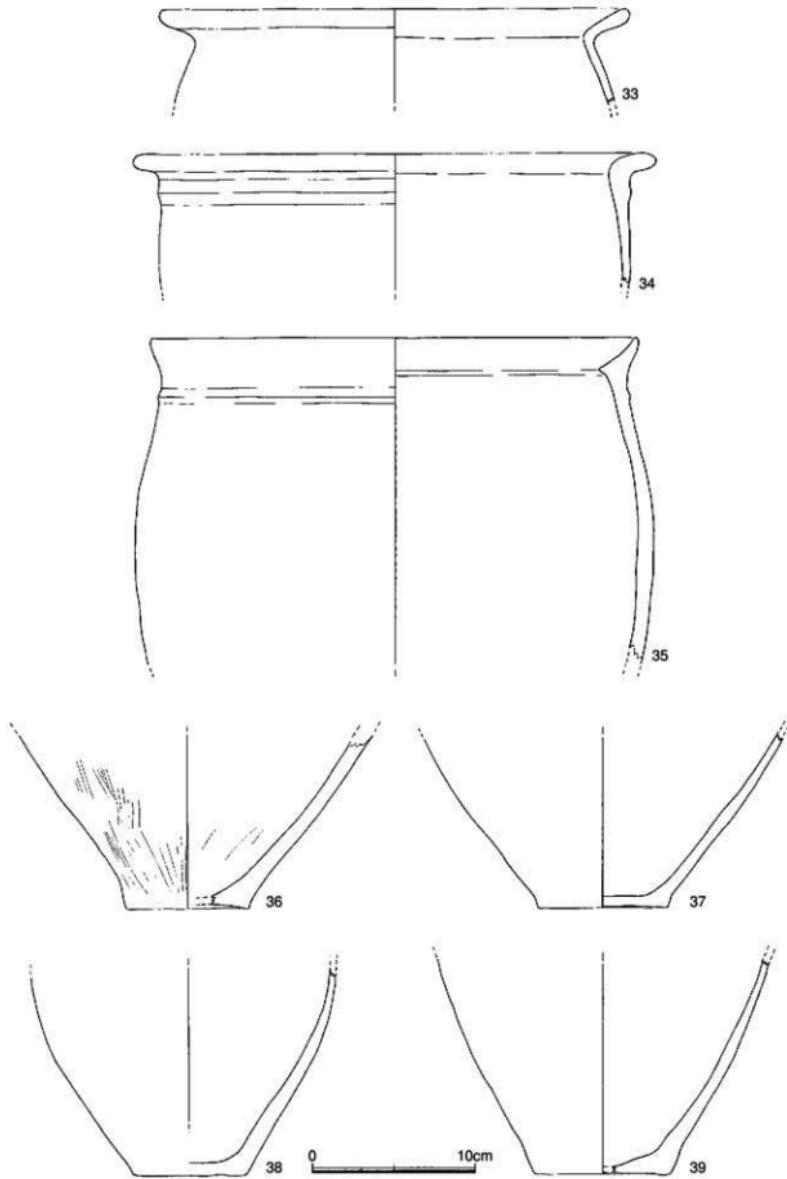


Fig.26 S C 26出土遺物実測図 2 (1/3)

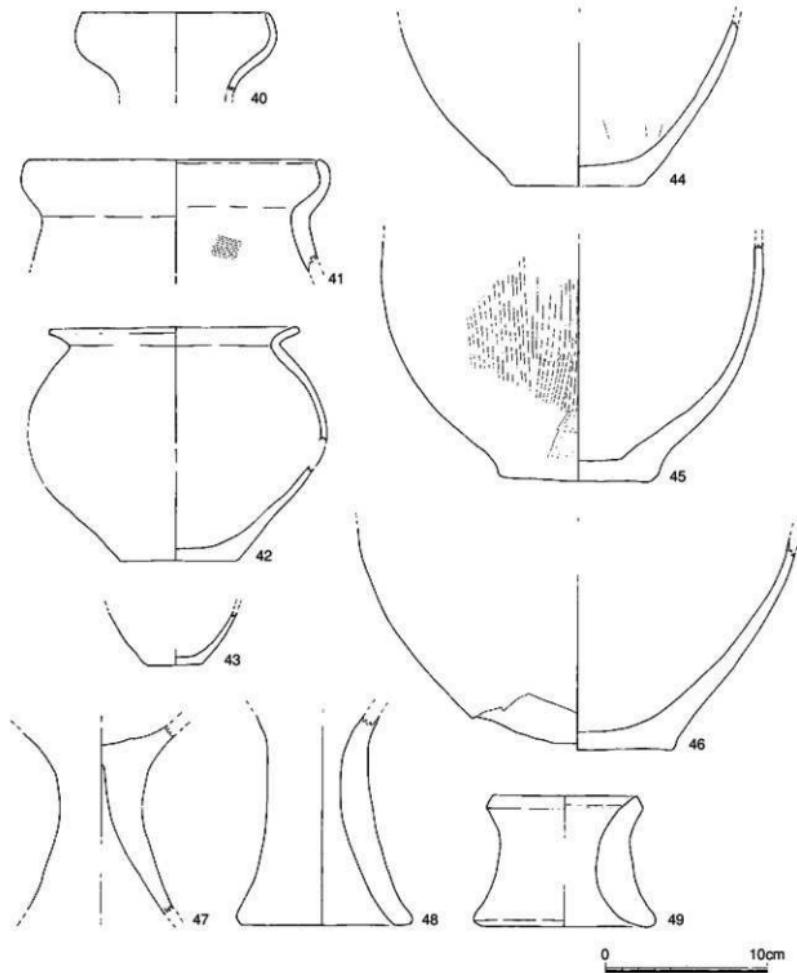


Fig.27 S C 26出土遺物実測図 3 (1/3)

46は弥生土器の壺である。40は袋状口縁の壺で口径は11.4cm。赤橙色を呈し、外面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土に径1~3mmの砂粒を少量含む。41も袋状口縁の壺で口径は18.0cm。淡灰白色を呈し、外面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土に径1mmの砂粒を少量含む。42は無頸壺である。上部と下部で接点がなかったが、同一個体と考えられる。口径15.4cm、底径7.2cm、推定器高14.4cm。淡橙色~橙白色を呈し、外面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土に径1~2mmの砂粒を少量含む。43は小壺の底部で底径は3.4cm。橙色を呈し、胎土に径1~3mmの砂粒を含む。44~46は壺の底部。



30



31



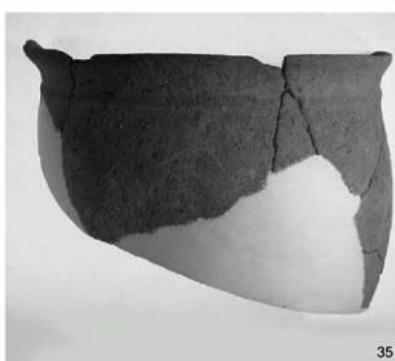
32



33



34

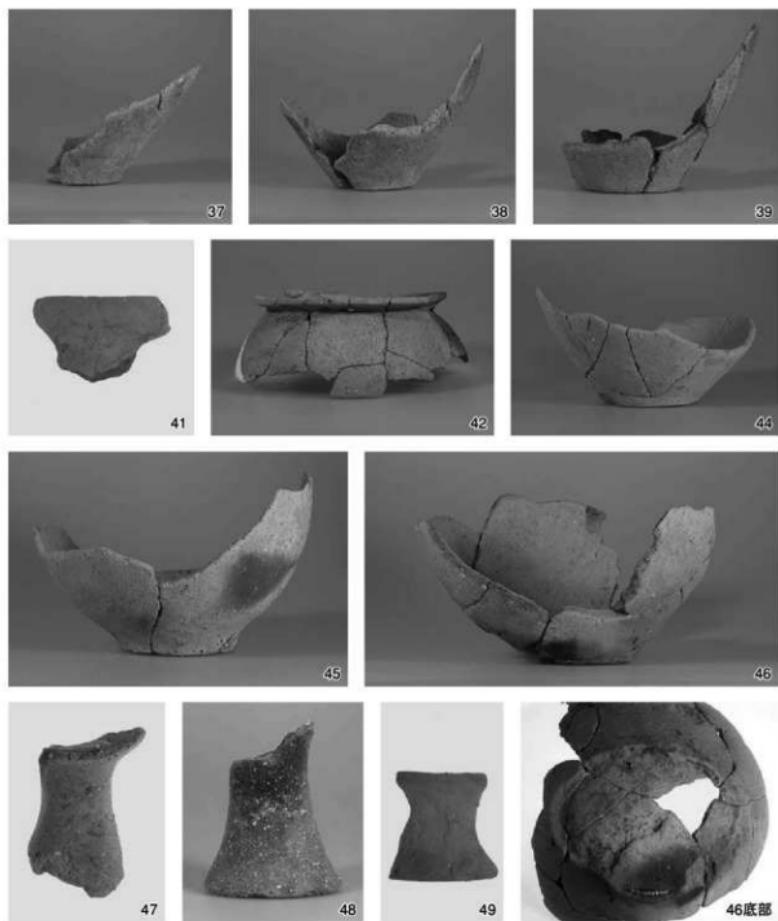


35

Ph.26 S C26出土遺物 1 (約1/4)

44は底径8.2cm。内面にハケメ調整の痕跡がかすかに残る。橙白色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。45は底径9.4cm。外面はハケメ調整を施す。淡橙色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。46は底径11.6cm。底部は焼成時に剥離しているとみられる。淡灰白色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を含む。47は高坏である。坏部と脚部端を欠損している。灰茶褐色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。48・49は器台である。48は脚部径10.8cm。淡橙色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を非常に多く含む。49は受け部径8.8cm、脚部径11.2cm。器高は8.0cmと低い。口縁部に稜があり、丁寧につくる。受け部内面に段をもつ。橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。

出土遺物からこの住居の時期は弥生時代後期初頭と考えられる。



Ph.27 S C 26出土遺物 2 (約1/4)

(4) 溝

S D 22 (Fig.28~30, Ph.28~32)

東向きに下がる傾斜の調査区南東部で検出した溝である。北西—南東方向の等高線に沿った向きにのびる。北側は試掘トレンチにより切られており、トレンチより北側まではのびていない。5 m分を検出している。幅は1.2m、深さは20cm程度である。西壁際に土器が集中して出土している。溝とし

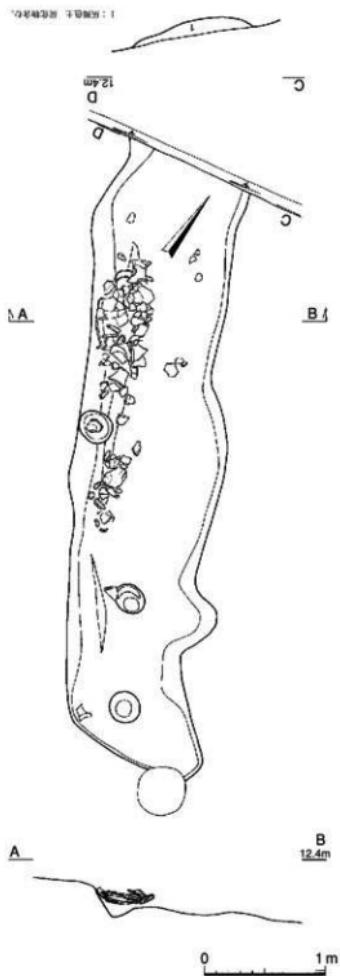


Fig.28 S D 22実測図 (1/40)



Ph.28 S D 22遺物出土状況 1 (東から)



Ph.29 S D 22遺物出土状況 2 (北から)



Ph.30 S D 22遺物出土状況 3 (東から)

たが、西壁の立ち上がりは急で、壁際は一段深くなっている。東壁は立ち上がりが認められたが、西壁ほどではなく、壁溝がある竪穴住居の西側だけが残存していたものである可能性はかなり高いと思われる。

出土遺物をFig.29・30に示す。50～54は弥生土器の甕である。50は口縁部「く」字の大型の甕である。底部は不安定な平底を呈する。やや重んでおり、口径39.5～41.7cm、底径9.8cm、器高48.5～50.7cmである。外面淡灰白色、内面灰黒色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。51も口縁部「く」字の甕で、口径は28.0cm。淡灰褐色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。52は鋤先口縁の甕で、口径は24.0cm。灰白色～橙白色を呈し、胎土に径1mm前後の砂粒を少量含む。53は口縁部「く」字の小型甕で、口径は17.0cm。外面ハケメ調整を施す。淡灰褐色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。54は甕の底部である。不安定な平底を呈する。底径は7.2cmである。橙白色～赤橙白色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を少量含む。55は袋状口縁の壺で、口径は11.8cm。橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。56～59は鉢である。56は体部が斜め上方に直線に立ち上がり、口縁部でやや内湾する。外面に板状工具による調整痕が認められる。口径18.8cm、底径7.0cm、器高10.3cmである。外

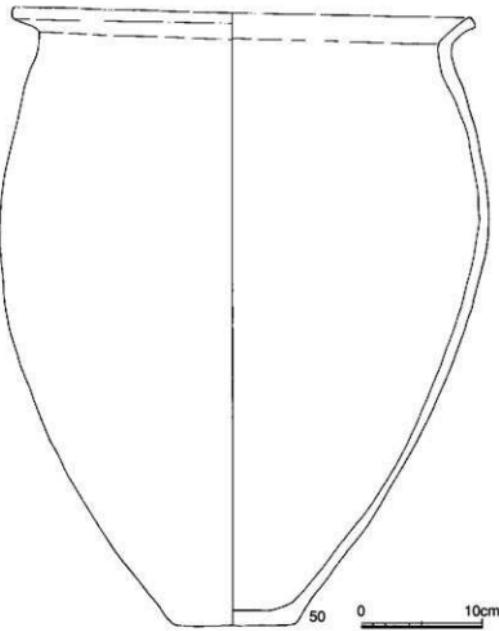


Fig.29 S D22出土遺物実測図 1 (1/4)



Ph.31 S D22出土遺物 1 (約1/6)

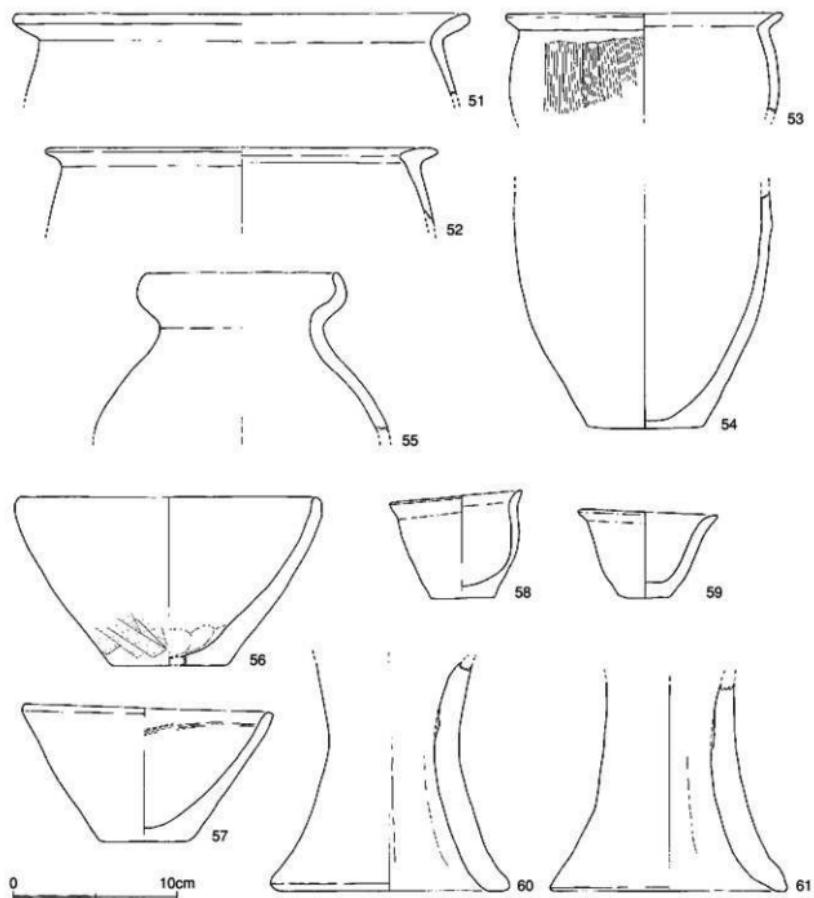
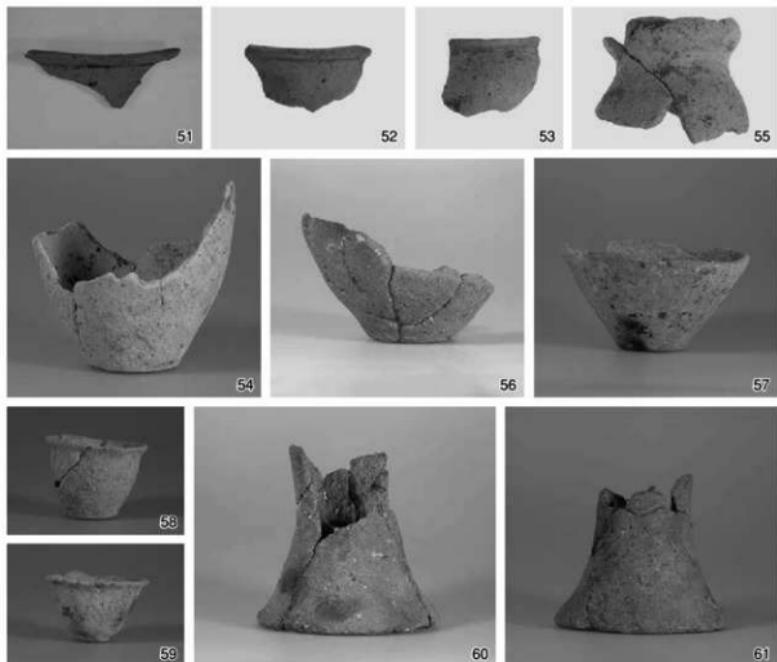


Fig.30 S D 22出土遺物実測図 2 (1/3)

面橙色～暗橙色、内面灰黒色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。57は体部から口縁端部まで斜め上方に直線に立ち上がる。内面上部にハケメ調整の痕跡が残る。口径15.3cm、底径5.5cm、器高7.6～8.5cmである。橙色～橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。58は小型の鉢である。口径8.2cm、底径4.0cm、器高5.9～6.6cmである。橙白色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。59も小型の鉢。口径8.6cm、底径3.0cm、器高5.1～5.4cmである。橙白色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。60・61は器台である。どちらも赤橙色を呈し、胎土に1～5mmの砂粒を多く含む。つくりも似ており、セットで作成されたものと思われる。60の脚部径は14.7cm、61の脚部径は14.6cmである。

52が弥生時代中期前半にさかのぼるが、そのほかの出土遺物より弥生時代後期前半～中頃の遺構と



Ph.32 S D22出土遺物 2 (約1/4)

考えられる。

S D 23 (Fig.31・32、Ph.33～35)

調査区南東部で検出した溝で等高線に沿って北西—南東方向に伸びる。7m分確認した。北西側は幅30cm、深さ10cmで北西端は北東に屈曲し、浅くなり消失する。南西部は幅60～80cmと広くなり、南西端は調査区外にのびる。

出土遺物をFig.32に示す。62は須恵器の環蓋である。口径14.2cm、器高4.7cm。外面灰白色、内面灰色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を少量含む。天井部に自然釉がかすかに残る。63～65は須恵器の环身である。63は口径12.5cm、受け部径14.4cm、器高4.1cm。底部は平底でヘラ削りが施される。口縁は直立気味でやや長い。焼成良好で堅く焼き締まっている。内面灰赤褐色、外面暗灰色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を少量含む。64は口径13.3cm、受け部径15.8cm、器高4.4cm。焼成不良で表面は摩滅している。口縁は内傾し、短く立ち上がる。白色を呈し、径1mm以下の砂粒をごく少量含む。65は口径12.6cm、受け部径14.2cm。口縁は内傾し、立ち上がりはそれほど長くない。灰白色を呈し、径1mm以下の砂粒をごく少量含む。66は土師器の甕である。長胴の体部に大きくラッパ状に開く口縁がつく。口径23.2cm、残存高24.0cm。淡灰褐色を呈し、径1～3mmの砂粒を少量含む。67は土師器甕の把手である。橙白色を呈し、径1～4mmの砂粒を含む。

出土遺物より古墳時代後期の溝と考えられる。



Ph.33 S D23 (東から)



Ph.34 S D23遺物出土状況 1 (北から)



Ph.35 S D23遺物出土状況 2 (北から)

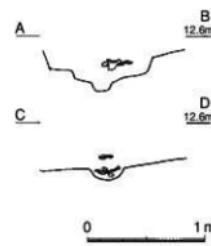
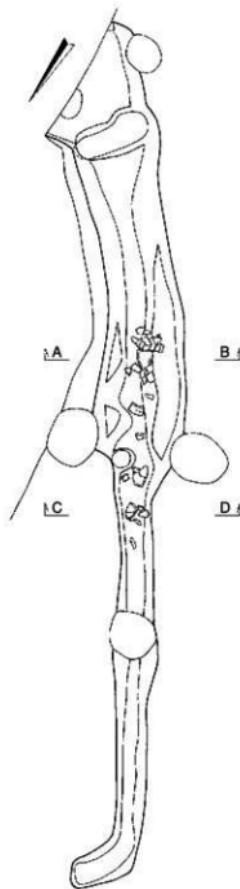


Fig.31 S D23実測図 (1/40)

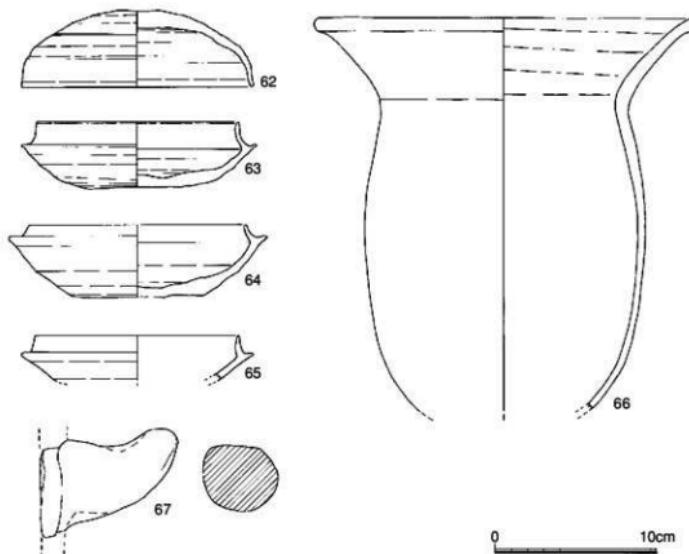
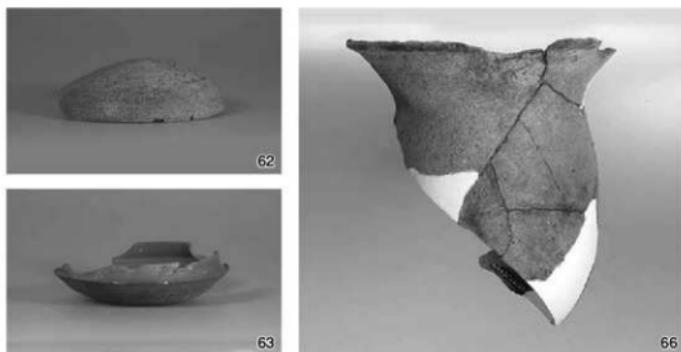


Fig.32 SD 23出土遺物実測図 (1/3)



Ph.36 SD 23出土遺物 (約1/4)

S D 24 (Fig.10・22)

調査区南東部で検出した溝で等高線に沿って北西—南東方向に伸びる。やや南西に湾曲している。幅50cm、深さ20~30cm、全長8m。弥生土器が出土しており、弥生時代後期の溝と考えられる。

S D 25 (Fig.10)

調査区南東部で検出した溝で等高線に沿って東西方向に伸びる。幅20cm、深さ20cm。東側は地形の傾斜により浅くなり消失する。長さ2.6m分確認した。遺物は出土しなかった。

(5) 土坑

S K 10 (Fig.33)

調査区中央西寄りで検出した。北側は搅乱で失われている。残存部で長軸4.2m、短軸3.2m、深さ30cmの楕円形の土坑である。S B18の柱穴に切られている。

出土遺物はあまり多くない。弥生土器が中心だが、土師器の壺、瓢の把手、須恵器の小片が少量みられるので古墳時代後期の遺構と考えられる。

S K 11 (Fig.34)

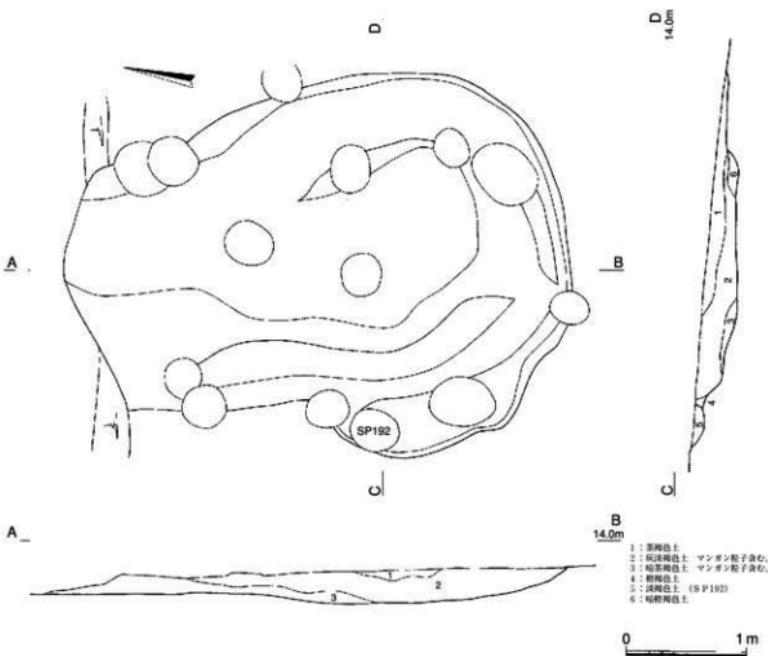
調査区中央付近に位置する。長軸2.4m、短軸1.4m、深さ10cmの楕円形土坑である。S D09を切っている。底面は南東方向に下っているが、中央部から南東側にかけて薄い炭化物層が水平堆積している。

出土遺物は弥生土器片が少量ある。弥生時代後期の遺構と考えられる。

S K 12 (Fig.35・36、Ph.36・37)

調査区中央付近で検出した土坑である。東側は削平を受け、失われている。残存部で南北2.3m、東西2.0m、深さ50cm程の規模である。

出土遺物をFig.36に示す。68は弥生土器の甕。凸レンズ状の底部である。底径7.0cm。橙白色を呈



し、径1~4mmの砂粒を含む。69は巾着形土器である。口径7.0cm、胴部径11.5cmで淡茶褐色を呈し、胎土に径1~3mmの砂粒を含む。韓国嶺南地方の土器の形を模倣したものである。70は脚付鉢の脚部である。脚部径9.1cm。淡灰褐色を呈し、径1~5mmの砂粒を多く含む。このほかに多くの土器片が出土したが、甕の胴部片が多く、図示できるものはない。

出土遺物より弥生時代後期後半の遺構と考えられる。

S K15 (Fig.37・38, Ph.38・39)

調査区中央、S C14の床面で検出した楕円形の土坑である。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ20cm。S C26を切る。土器がまとめて出土している。

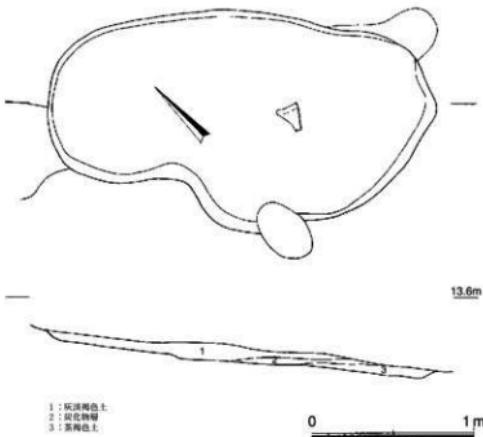


Fig.34 SK 11実測図 (1/30)

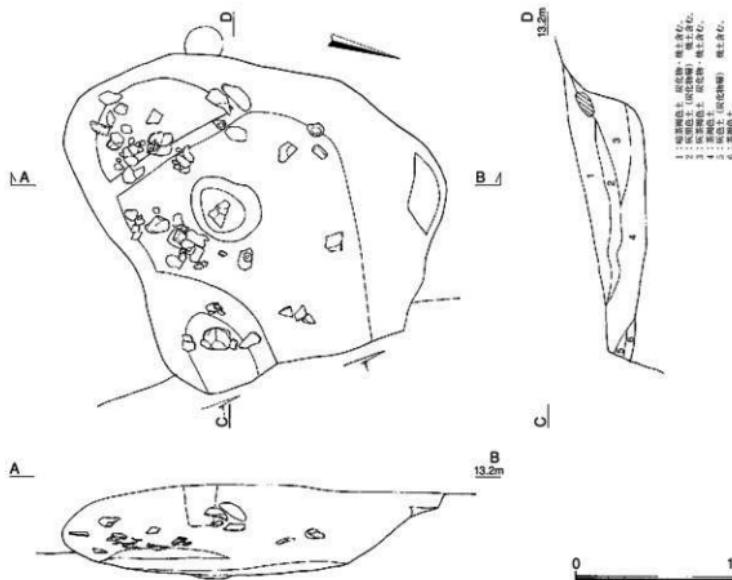
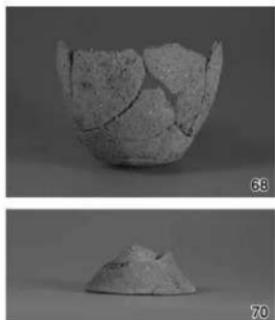


Fig.35 SK 12実測図 (1/30)



Ph.37 S K 12遺物出土状況（西から）



Ph.38 S K 12出土遺物（約1/4）

出土遺物をFig.38に示す。71～77は弥生土器の甕である。71は「く」字に屈曲する口縁で、口径は35.0cm。橙白色を呈し、胎土に径1～4mmの砂粒を含む。72も「く」字の口縁で口縁部は短い。口径28.0cmで、橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。73は小型の甕で、体部はやや内傾して立ち上がり、口縁部は「く」字に外反する。口径17.2cm。外面にハケメ調整の痕跡がわずかに残る。橙白色を呈し、胎土

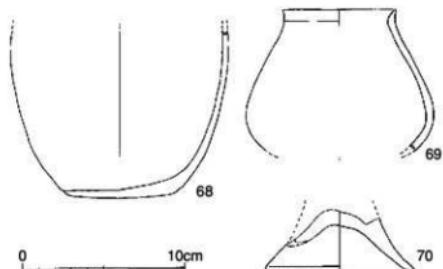


Fig.36 S K 12出土遺物実測図（1/3）

に径1～6mmの砂粒を含む。74は甕もしくは壺の底部で、底径7.6cm。淡橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。73と胎土が似ており、同一個体の可能性がある。その場合、器高は13.5cmに復元できる。75は底径7.8cm。淡黄白色を呈し、胎土に径1～8mmの砂粒を多く含む。76は底径8.5cm。淡灰白色～橙白色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。77は底径9.0cm。外面淡橙色、

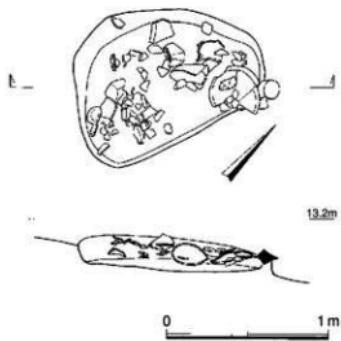


Fig.37 S K 15実測図（1/30）



Ph.39 S K 15遺物出土状況（西から）

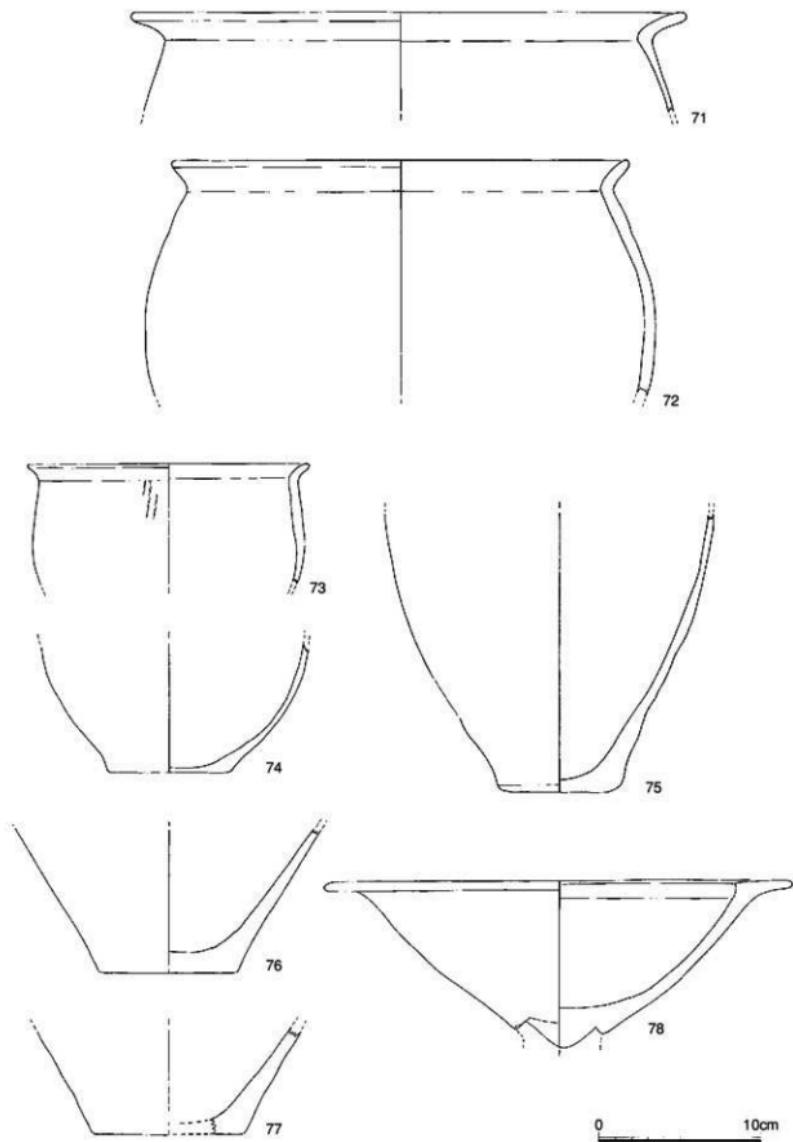


Fig.38 SK 15出土遺物実測図 (1/3)



75



78

Ph.40 SK 15出土遺物 (約1/4)

内面淡褐色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。78は高坏の坏部である。口径28.8cm。橙白色を呈し、胎土に径1～7mmの砂粒を多く含む。

出土遺物より弥生時代後期前半の遺構と考えられる。

SK 16 (Fig.39・40、Ph.40～42)

調査区中央付近に位置する不定形の土坑。プランの確認ではSK12に切られているように思えたが、はっきりしなかった。東側は斜面の傾斜により立ち上がりがはっきりしない。

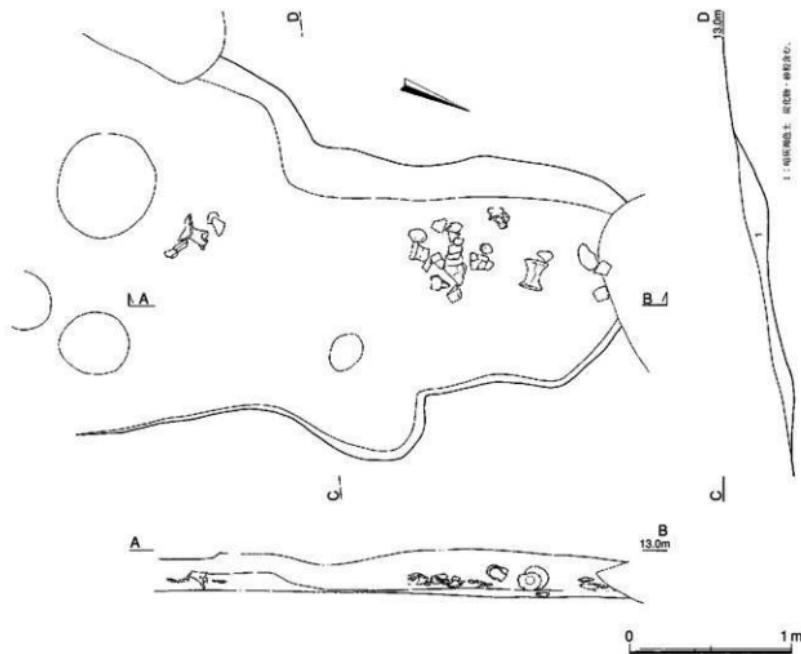
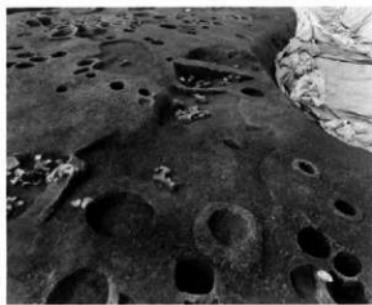


Fig.39 SK 16実測図 (1/30)



Ph.41 SK 16 (南から)



Ph.42 SK 16遺物出土状況 (北東から)

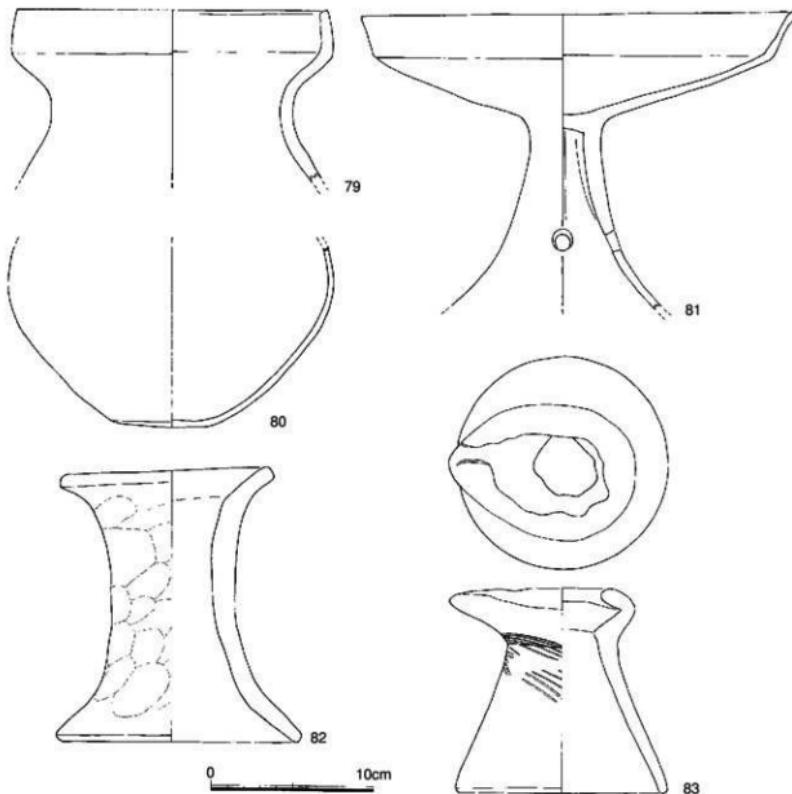
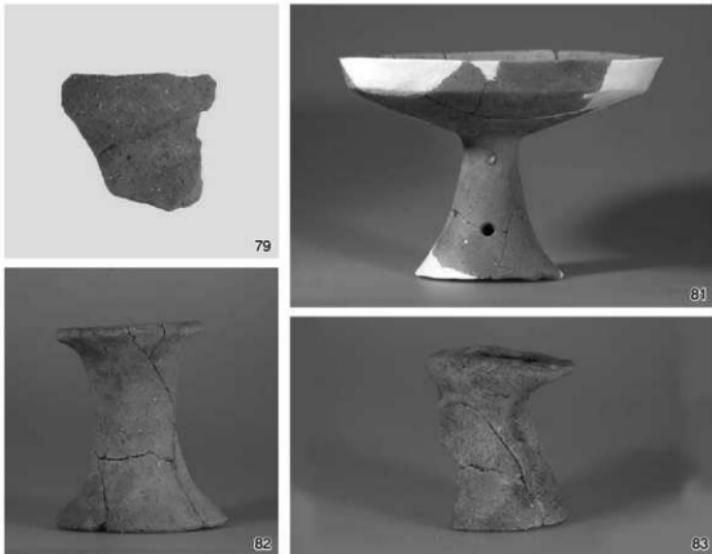


Fig.40 SK 16出土遺物実測図 (1/3)



Ph.43 S K 16出土遺物（約1/4）

出土遺物をFig.40に示す。79は壺である。口径は19.0cm。赤橙色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。80は壺の底部である。底径は6.4cm。器壁は薄い。淡橙色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を含む。81は高基である。脚部を欠損している。脚部に3ヶ所円形の透孔がある。口径は26.6cm。暗赤橙色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。82は器台である。受け部径12.4cm、脚部径15.0cm、器高16.4～17.0cm。橙色～淡褐色を呈し、胎土に胎土に径1～5mmの砂粒を含む。83は舟形器台である。脚部径13.0cm、器高12.5cm。脚部にタタキ調整をおこなう。橙色～淡橙白色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を多く含む。

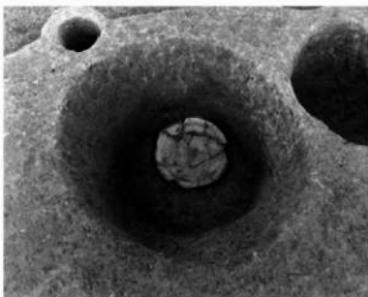
出土遺物より弥生時代後期後半～終末の遺構と考えられる。

(6) ピット出土の土器 (Fig.41, Ph.43・44)

ピットから出土した土器の一部をFig.41に示す。84は須恵器の提瓶。把手は欠損している。胴部の片側は平坦で、外面カキメ調整。その反対はナデ調整。内面には同心円文の当て具痕が残る。口径9.2cm、器高20.8～21.7cm、胴部径18.2cm。灰白色～灰黒色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。S C 05を切る S P 56より出土した (Fig.18, Ph.43)。85は器台。受け部径8.2cm、脚部径11.1cm、器高11.3cm。橙色～橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を多く含む。S C 06床面で検出した S P 63より出土した (Fig.18)。86は高基の基部。口径29.3cm。橙白色を呈し、胎土に径1～5mmの砂粒を含む。調査区中央よりやや北、S C 08の南に隣接する径80cm、深さ50cmのS P 100の床面に貼り付くかたちで出土した (Ph.44)。



Ph.44 S P 56遺物出土状況（北から）



Ph.45 S P 100遺物出土状況（南から）

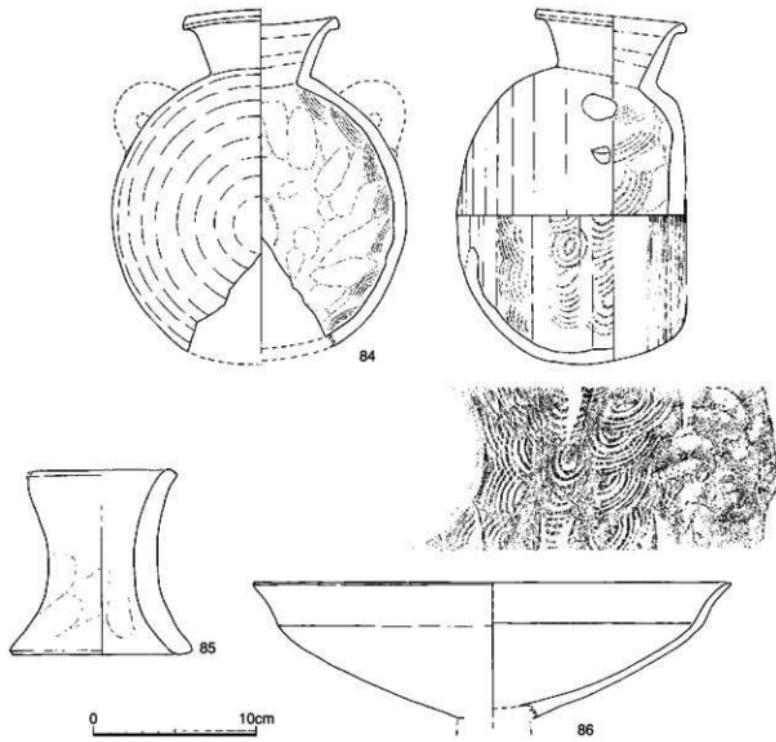


Fig.41 ピット出土遺物実測図 (1/3)

(7) 石器 (Fig.42、Tab.1)

B区出土の石器をFig.42に示す。詳細はTab.1にまとめた。

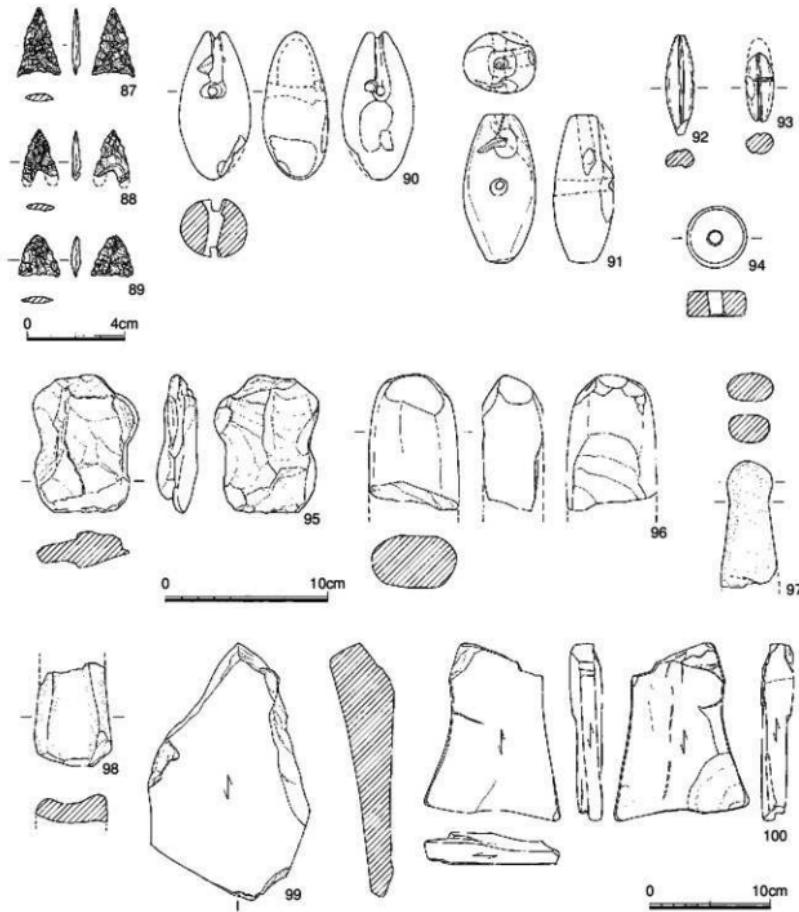


Fig.42 B区出土石器実測図 (87~89:1/2、99・100:1/4、他:1/3)

Tab.1 B区出土石器一覧

No.	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	No.	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ
87	石鏃	包含層	黑曜石	2.7	1.8	0.3	94	鋸鋸車	包含層	滑石	3.7	3.7	1.6
88	石鏃	SK10	黑曜石	(2.1)	1.5	0.3	95	打製石斧?石鏃?	包含層	砂岩	8.5	6.4	2.5
89	石鏃	SP45	黑曜石	1.7	1.6	0.3	96	磨製石斧	包含層	玄武岩	(8.3)	(5.6)	(3.7)
90	石鏃	包含層	滑石	9.0	4.4	4.1	97	磨製石斧?	SP332	粘板岩	(7.8)	(3.5)	(1.7)
91	石鏃	包含層	滑石	9.0	4.4	3.8	98	紙石?	SP150	砂岩	(6.3)	(4.7)	(1.7)
92	石鏃	SC05・06	粗粒砂岩	6.0	1.7	1.1	99	紙石	包含層	玄武岩?	20.8	13.1	5.2
93	石鏃	SC08	滑石	(4.1)	1.7	1.3	100	紙石	包含層	砂岩	14.5	11.0	2.6

計測後の単位:cm ()は残存部

4. C区の調査 (Fig.43, Ph.46)

C区は対象地の南東隅にあたり、南東向きの斜面である。西側は団地造成時に削平を受けている。調査面積は762m²である。掘立柱建物3棟、竪穴住居1軒、溝5条、土坑8基、ピット多数を検出した。縄文時代、古墳時代後期、奈良時代、平安時代の4時期がある。包含層からは奈良時代の須恵器が多量出土した。

遺構検出面には2段の平坦面があり、上段と下段の比高差は2m程ある。上段は緩い傾斜があり、北西側、上部は削平を受け、遺構が確認できなくなる。中央付近は縄文時代の陥し穴と考えられるS K35の存在から、自然の地形が残っていると考えられる。やや北寄りはS B47が柵でなく建物であるとすると古代以降に段造成を受けている事になる。

下段は南東隅で地山が下っていくが、その上に整地土があった。時間の都合で整地面で調査をおこなうことができなかったが、整地上には奈良時代の遺物が含まれていた。さらに調査区外の南東側に遺構が展開するものと考えられる。下段の北西部の平坦面と斜面の境は直線的に段差ができるおり、段の覆土は水田耕作土らしい土であった。また、この周囲には遺構が検出できなかったところをみると、この中世以降とみられる水田造成時に削平を受けているようである。南側は斜面の際まで遺構が存在しているところをみると、古代に段造成がおこなわれ、その後、それほど削平を受けていないようである。

以上よりC区は古代に段造成がおこなわれ、北側はそれ以降にもう一度水田造成により地形の改変がおこなわれていることがわかる。



Ph.46 C区全景（右上が北）

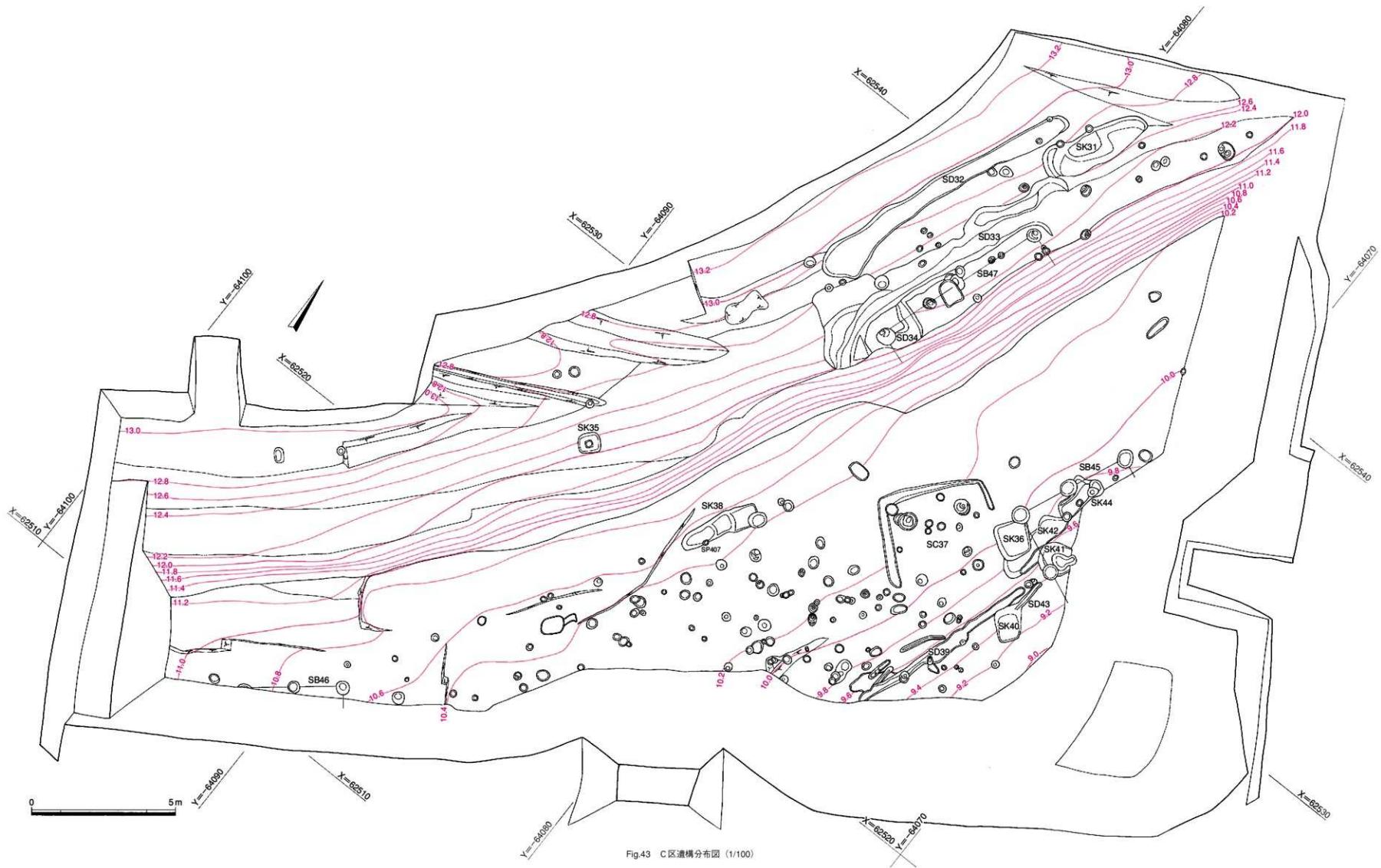


Fig.43 C区遺構分布図 (1/100)

(1) 掘立柱建物

S B 45 (Fig.44, Ph.47)

下段の調査区北東部に位置する。西側の柱列2間分、南側の柱列1間分を確認した。東側調査区外へ展開する。S P382がS K44、S P383がS K36、S P430がS K41を切っている。柱穴は径50~60cmの円形で柱間は2.0~2.2m。柱痕跡が残り、S P383には柱材が残っていた。

柱穴から奈良時代の須恵器・土師器が出土しており、奈良時代の建物と考えられる。

S B 46 (Fig.45, Ph.48)

下段の調査区南端で検出した柱列で、東側調査区外に展開する建物と考えられる。西側の柱列2間分を確認した。柱穴は径40~50cmの円形で柱間は1.7mである。

S P427とS P438から奈良時代の須恵器・土師器が出土しており、奈良時代の建物と考えられる。

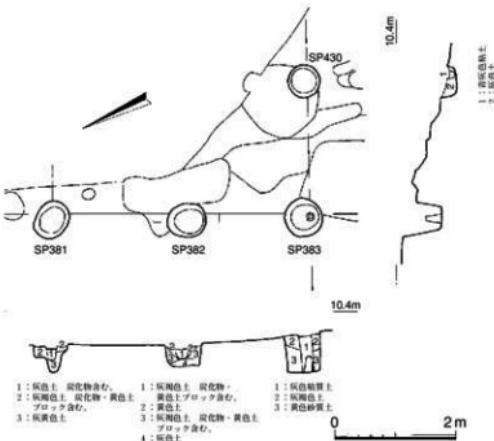


Fig.44 S B 45実測図 (1/80)



Ph.47 S B 45 (東から)

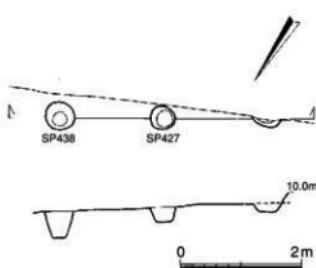


Fig.45 S B 46実測図 (1/80)



Ph.48 S B 46 (東から)

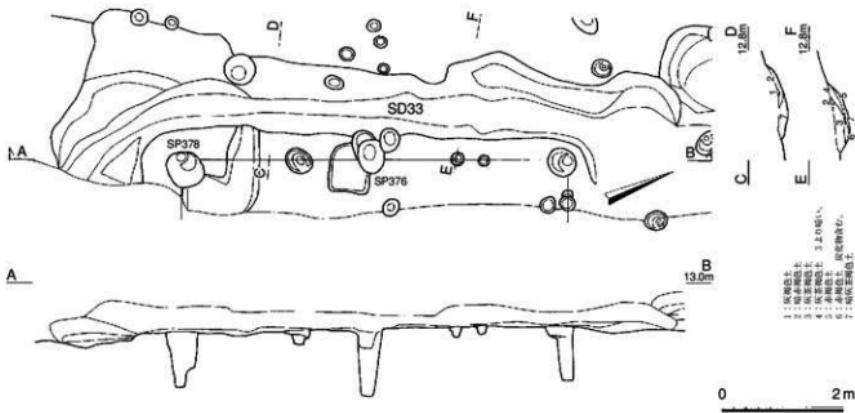


Fig.46 S B47・SD33実測図 (1/80)

S B47・SD33 (Fig.46・47)

上段の調査区北部に位置する。1m近くの非常に深い柱穴が3つ並んだため同一建物の柱穴とした。柱穴は円形で、上部で径40~60cmであるが、底面では20cm程になる。柱間隔は3mで広めである。西側にこの柱列を囲むように溝S D33があり、建物に付随する溝と考えられる。排水溝であろうか。幅は1.2m、深さは西肩から60cmある。

古墳時代後期以降に盛り土造成をおこなっていない限り、下段の古墳時代後期のSC37の位置から考えると、建物は大きく東には展開しないであろう。

柱穴からは奈良時代の須恵器・土師器が出土しており、奈良時代の建物と考えられる。また、SD33からはFig.47に示すような遺物が出土した。**101**は須恵器の壺蓋。摘みを欠損する。口径13.0cmで、灰色を呈し、胎土に径1~2mmの砂粒を含む。**102**は須恵器の高台付壺。体部は丸みをもって立ち上がる。高台は短く、内傾する。口径14.4cm、高台径8.8cm、器高3.3cm。灰色~灰黒色を呈し、胎土に径1mmの砂粒を少量含む。**103**は須恵器の皿。口径19.0cm、器高1.8cm。灰白色を呈し、胎土に径1mm以下の砂粒をわずかに含む。内面に墨痕があり、硯に転用されている。

(2) 竪穴住居

SC37 (Fig.48・49, Ph.49)

下段、調査区東側や北よりで検出した竪穴住居である。削平を受け壁溝の西側と柱穴しか残存していない。一辺8m程度の方形の竪穴住居となろう。柱穴は4ヶ所で、柱間は2m。竪は確認されて

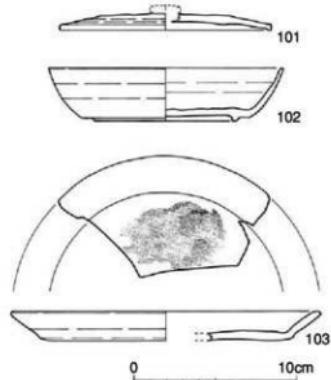


Fig.47 S D33出土遺物実測図 (1/3)

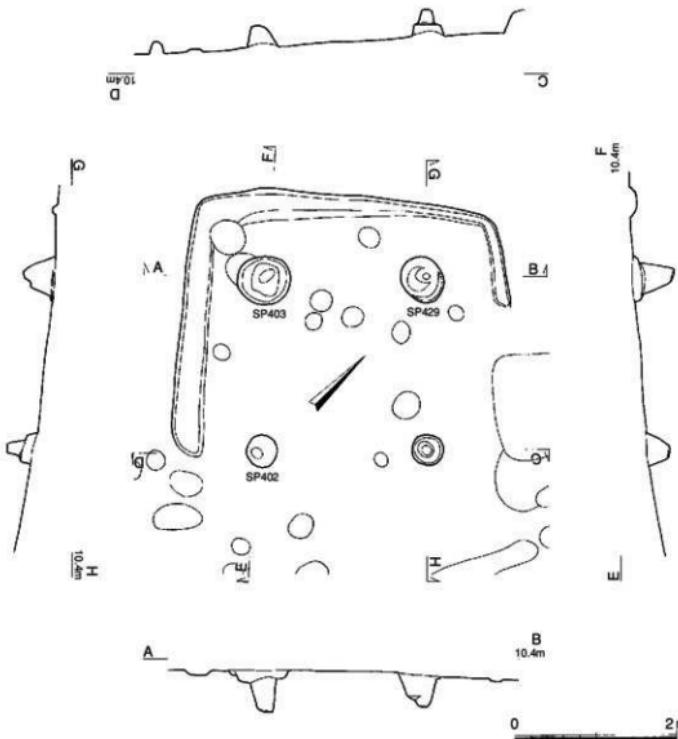
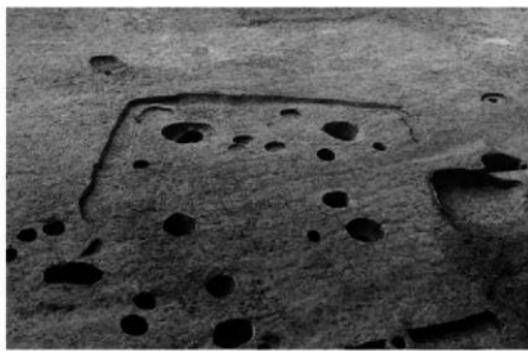


Fig.48 S C 37実測図 (1/60)



Ph.49 S C 37 (東から)

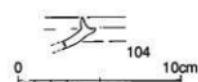


Fig.49 S C 37
出土遺物実測図 (1/3)

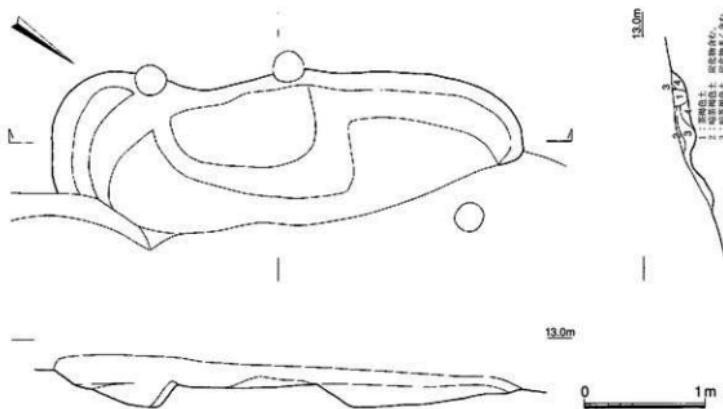


Fig.50 SK 31実測図 (1/40)

ない。削平を受けた時期は古代の段造成時と考えられるが、それ以降の水田造成時の可能性もある。

出土遺物をFig.49に示す。104はS P403から出土した須恵器の壊身である。口縁部は内傾し、立ち上がりは短い。灰色を呈し胎土に径1~2mmの砂粒を少量含む。そのほか柱穴から古墳時代後期の須恵器・土師器が、壁溝から土師器が出土しており、古墳時代後期の竪穴住居と考えられる。

(3) 土坑

S K 31 (Fig.50)

上段の調査区北部に位置する。南北3.9m、東西は1.2m分残存しているが、東側は検出面の斜面の落ちがあり、確認できない。

西壁中央部は掘り残して20cm
程高くなっている。3層に炭化
材を多く含んでいた。

奈良時代の須恵器・土師器
が出土しており、奈良時代の
遺構と考えられる。

S K 35 (Fig.51, Ph.50)

上段の調査区南西部、南東に緩やかに下る斜面に位置する。長軸0.8m、短軸0.7mの隅丸長方形で、深さは70cmである。床面中央に25cmの隅丸方形、深さ30cmのピットがある。

遺物は出土しなかったが、
形態から縄文時代の陥し穴と
考えられる。

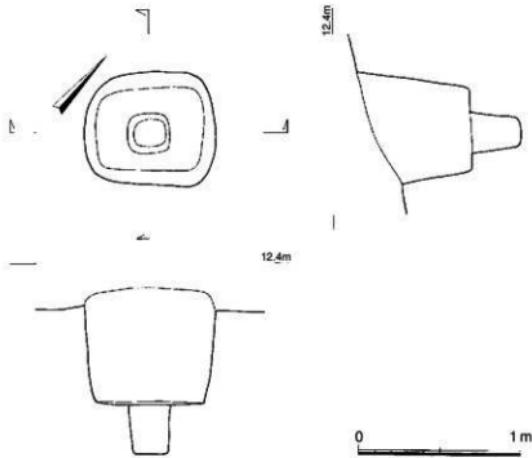


Fig.51 SK 35実測図 (1/30)



Ph.50 SK 35 (南から)



Ph.51 SK 35 (東から)

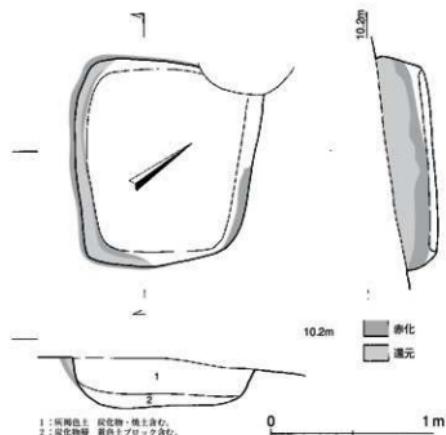


Fig.52 SK 36実測図 (1/30)

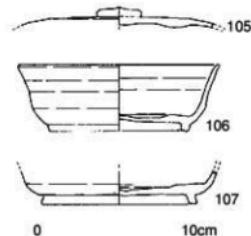


Fig.53 SK 36出土遺物実測図 (1/3)



Ph.52 SK 36出土遺物 (約1/4)

S K 36 (Fig.52・53, Ph.51・52)

下段、調査区北東部で検出した焼土坑である。長軸1.3m、短軸1.1mの長方形で深さは30cm。壁面は還元されて灰色を呈し、硬化しており、その外側は赤化している。S B45の柱穴、S P383に切られる。

出土遺物をFig.53に示す。105は須恵器の壺蓋である。扁平な擬宝珠様摘みが付く。灰色～灰白色を呈し、胎土に径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む。106は須恵器の高台付壺。体部は外反して立ち上がる。高台は内傾する。口径12.4cm、高台径8.6cm、器高4.1cm。灰色～黒色を呈し、胎土に径1mm以下の砂粒を含む。107も須恵器の高台付壺である。高台は外側に開く。高台径9.6cm、灰色～灰白色を呈し、胎土に径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む。

出土遺物より奈良時代の焼土坑と考えられる。

5. 旧石器時代の遺物 (Fig.54・Tab.2)

コノリ遺跡第4次調査では少量の旧石器時代資料が出土した。本遺跡では当該期の最初の資料確認である。しかし、本来の洪積世堆積物内に安定して包含された遺物はない。すべて後世の遺構内や包含層からの出土であり、早い段階に本来の埋没状況から遊離し、後世の遺物と共に再堆積したものと考えられる。検討の結果、旧石器時代の資料と判断できた資料は28点ある。すべて黒曜石製であり、安山岩類はなかった。このうちA区に剥片1点、C区に使用痕有剥片1点があり、他の26点はB区出土である。B区の26点は約半数が古墳時代竪穴式住居跡SC13埋土とその東側斜面に比較的集中して出土した。しかし、集中度合いは低く、B区の全体に遺物が散在することや、付近は斜面の遺構や包含層の保存状態が良好であったことなどから、この付近に旧石器時代の本来の遺物集中分布域が存在したと見るより、丘陵上から遊離した遺物が集中埋没しやすい状況にあったと考えるべきであろう。B区からはナイフ形石器1点、使用痕有剥片3点、剥片14点、碎片8点がある。以上のうち、ここでは7点について報告する。

108はナイフ形石器である。基部と先端部を欠損する。形態や型式は不明であるが、端正な縱長剥片の打点部を先端とし、側縁に入念な背潰しを施す。背潰しは腹背両面から行われている。109は縱長剥片である。背面右側に自然面と石核調整剥離を残す。角礫素材であり腰岳産黒曜石か。110は縱長剥片であり、腹面には風化の新しい調整剥離がある。111は縱長剥片の先端破片である。左側縁に微細剥離が認められる。112はくさび形石器の削片である。上下両端は潰れている。113は石核調整剥片であり、背面に円礫素材面を残す。縁辺に二次調整がある。114は分厚い不定形剥片であり、円礫素材である。縁辺に微細剥離が認められる。これらは、109がA区、114がC区、他はB区の出土品である。

Tab.2 旧石器時代資料一覧

番号	地区	遺構・地点	層位・取上状況	器種	石材	部位	長さ	幅	厚さ	遺物番号	備考
1	A	北側	清掃時	Flake	黒曜石	完形	3.7	1.9	0.8	109	
2	B	SC08北東		chip	黒曜石	完形	1.1	1.6	0.3		
3	B	SC13・Ⅲ区		Flake	黒曜石	周囲欠損	2.4	1.7	0.7		
4	B	SC13・Ⅱ区	下層	Flake	黒曜石	基部のみ	1.2	2.1	0.4		
5	B	SC13・Ⅱ区	下層	chip	黒曜石	先端欠損	1.3	1.5	0.3		
6	B	SC13 ベルト③		chip	黒曜石	側端欠損	1.4	1.1	0.2		
7	B	SC?		chip	黒曜石	先端のみ	1.5	1.5	0.3		
8	B	SC05・06	上層確認時	Flake	黒曜石	完形	2.8	2.3	0.4	110	
9	B	SK12北側		U・Flake	黒曜石	完形	2.1	1.4	0.5		
10	B	SD22		Flake	黒曜石	完形	1.5	2.7	0.7		作業面調整剥片
11	B	SD22		Flake	黒曜石	先端欠損	2.9	1.6	0.6		石核調整剥片
12	B	SD22		chip	黒曜石	完形	1.4	1.5	0.3		両ボジ面
13	B	SD23 I区		chip	黒曜石	完形	1.2	1.5	0.3		両ボジ面
14	B	SP194		KnifeBlade	黒曜石	基部欠損	2.8	1.6	0.7	108	
15	B	SP255		Flake	黒曜石	先端欠損	1.4	1.8	0.3		
16	B	SP258		chip	黒曜石	完形	2.0	1.1	0.2		両ボジ面
17	B	SP261		Flake	黒曜石	完形	1.4	2.4	0.7		
18	B	SP286		U・Flake	黒曜石	基部のみ	1.5	1.9	0.6	113	
19	B	SP293		U・Flake	黒曜石	先端のみ	2.4	1.7	0.4	111	
20	B	SP298		Flake	黒曜石	先端欠損	1.2	1.6	0.4		
21	B	SP270		Flake	黒曜石	完形	2.0	2.0	0.6		
22	B	包含層		Flake	黒曜石	基部・側端欠損	2.7	2.3	0.9		針尾島産か
23	B	包含層		chip	黒曜石	完形	2.3	1.4	0.7		石核調整剥片
24	B	包含層		Flake	黒曜石	先端のみ	1.2	2.1	0.5		
25	B	包含層		Flake	黒曜石	先端のみ	1.3	2.4	0.5		
26	B	南側	遺構検出時	Flake	黒曜石	先端破片	1.7	2.2	0.9		
27	B	試掘トレーン南東側	清掃時	Flake(削片)	黒曜石	完形	2.6	1.1	0.7	112	
28	C	SP407		U・Flake	黒曜石	完形	2.8	1.5	1.2	114	

以上、出土資料の一部を報告したが、定型石器類が少なく時期の比定は難しい。A・C区は時期比定が困難であり、B区のナイフ形石器 108は背潰しの特徴にナイフ形石器古段階の様相がある。また、剥片 110・111は打面は不明であるが、単設であり、同時期としても矛盾はない。一方、くさび形石器 112は細石刃石器群以降に多く認められるものである。剥片 110・111の腹面への二次調整もこの時期の可能性がある。このように現時点では編年情報が不十分であるが、あえて言うならB区の資料には、ナイフ形石器段階は前半期のAT降灰直前から降灰後第1期までの段階、そして細石刃石器群段階と、二時期の石器群が混在していると考えたい。

コノリ遺跡の周辺は昭和40年代早くから宅地開発が進んだために調査が不十分であり、特に旧石器時代の状況は不明であった。南方の野方遺跡群（勧進原、塚原西、4丁目、古墳A群等）ではナイフ形石器類や細石刃石器群が各所で確認される。一方、北側の湯納遺跡では細石刃核、東側の橋本一丁田遺跡で細石刃、橋本榎田遺跡でナイフ形石器の単独出土例がそれぞれ知られるのみで詳細は不明である。今後のこの地域の調査に期待したい。

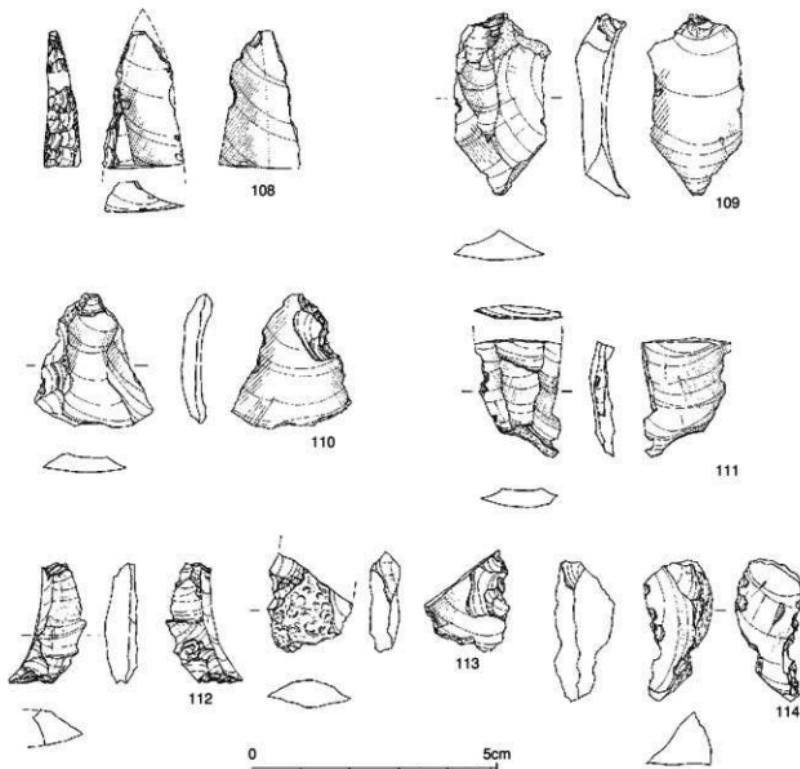


Fig.54 旧石器時代の遺物実測図 (1/1)

III まとめ

今回の調査では旧石器時代から中世後半までの遺構・遺物が発見された。

旧石器時代はナイフ形石器段階前半期と細石刃石器段階の2時期の遺物が発見されており、この地域での新たな資料が追加された。

縄文時代では遺物が出土せず、確実性に乏しいが、C区で陥し穴が1基確認された。西側の3次調査地点でも1基発見されており、石錐の出土とあわせて、この丘陵が狩猟場であったと考えられる。石錐の形態から弥生時代前期までは狩猟場であったとみられる。

弥生時代後期に入ると集落が営まれ、終末まで継続する。B区や3次調査地点では中期の土器も散見されるので、中期より集落が営まれ始めた可能性がある。C区では弥生時代の遺構は発見されなかった。古代の造成によって失われた可能性もあるが、縄文時代の陥し穴が残っていたことを考えると、もともと存在しなかったと思われる。しかし、削平された旧丘陵の上部にはさらに多くの住居が展開していたものと思われる。早良平野の弥生時代集落は後期初頭に途絶えるところが多く、後期末から再び増加している。コノリ遺跡では後期初頭から後末まで集落が継続しており、早良平野の集落動向を考える上で興味深い。

再び集落が営まるのは古墳時代後期である。B・C区で掘立柱建物、竪穴住居や溝などが存在する。出土した須恵器は九州編年ⅢB期、6世紀第4四半期のものが中心である。

奈良時代に入るとC区で遺構・遺物が認められる。遺物は報告できなかったが、包含層から多数の須恵器が出土している。遺構は段造成された面に存在しており、今回はその一部を調査したにすぎない。団地造成で地中深く埋まっているが、さらに東側に展開していると考えられる。

本文で触れていないが、C区では11世紀代の白磁碗（大宰府分類XI類）が溝から出土している。

中世後期はB区で柱穴を確認している。遺物はわずかな青磁片と土師器の小皿があるのみである。3次調査では溝や井戸など見つかっており、青花をはじめ出土遺物も多い。集落の中心は西側にあったと考えられる。

今回の調査は斜面ということで遺構、特に竪穴住居のプランが確認できなかった。包含層から遺物の出土位置を記録しながら掘り下げられれば、住居の規模を押さえられたかもしれない。

最後に本文で説明できなかった遺構をTab.3に示す。すべてC区の遺構である。

Tab.3 その他の遺構一覧

遺構名	位 置	時期	概 要	出土遺物
SD32	北部上段	11c	南北方向の溝。等高線に平行する。長さ10m、幅0.7m、深さ20cmだが、削平を受けている。	土師器、須恵器、白磁碗 XI類
SD34	北部上段	奈良	SD33から東向きにのびる。東側は段造成で失われている。長さ1.5m残存。幅0.5m、深さ5cm。	土師器
SK38	中央下段		細長い土坑。長軸2.9m、短軸0.6~0.8m、深さは20~30cmで階段状に南側が深い。	土師器
SD39	東部下段		南北方向の溝。等高線に平行する。7m確認したが、南は発掘区外にのびそう。幅0.3m~0.5m、深さ10cm。	土師器、須恵器
SK40	東部下段	奈良	長軸1.2m、短軸1m、深さ30cmの長方形土坑。SD39を切る。	土師器、須恵器
SK41	東部下段	奈良	径1.2m程の円形土坑。深さ20cmで、中央はさらに20cm凹む。北東側は調査区外にのびる。SB45の柱穴SP430に切られる。	土師器、須恵器
SK42	東部下段	奈良	長軸2.8m、短軸0.8m、深さ20cmの不整形土坑。SK36・41・44に切られる。	土師器、須恵器
SD43	東部下段		南北方向の溝。等高線に平行する。長さ10m、幅0.2m、深さ15cm。	土師器
SK44	東部下段	奈良	長軸1.7m、短軸0.9m、深さ30cmの不整形土坑。SB45の柱穴SP382に切られる。	土師器、須恵器

報告書抄録

ふりがな	このりいせき に					
書名	コノリ遺跡 2					
副書名	コノリ遺跡群第4次調査の報告					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	876					
編著者名	田上勇一郎、吉留秀敏					
編集機関	福岡市教育委員会					
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL 092-711-4667					
発行年月日	西暦2006年3月31日					

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
このりいせきぐん コノリ遺跡群	ふくおかんふくおかし 福岡県福岡市 にしくじゅうろくうちょうだんち 西区拾六町団地	40130	2831	33° 33° 55°	130° 18° 25°	2004.11.17 ~ 2005.03.31	2,025	団地建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
			市町村	遺跡番号	件数	種類	件数	種類
コノリ遺跡群	散布地	旧石器時代				ナイフ形石器		
		縄文時代	陥し穴	1	石器			
	集落	弥生時代	堅穴住居	5	弥生土器			
			溝	3	石斧			
			土坑	6	石鍬			
			ビット	多数				
	集落	古墳時代	樋	1	須恵器			
			掘立柱建物	3	土師器			
			堅穴住居	3	石鍬			
			溝	2	劫鍬車			
			土坑	1				
			ビット	多数				
	集落	古代	掘立柱建物	3	須恵器			
			溝	3	土師器			
			土坑	6				
			ビット	多数				
	集落	中世	掘立柱建物	1	青磁			
			ビット	多数	土師器			
	不明		掘立柱建物	1				
			溝	4				
			土坑	1				
			ビット	多数				



KONORI SITE 2

—Results of the 4th excavation of Konori sites—
Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.876



2006

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY